

はか た  
博 多 156

—博多遺跡群第 201 次調査報告—



2016

福岡市教育委員会

# 序

福岡市は、古くから中国大陸や朝鮮半島など東アジアとの文化交流の門戸として、また対外交易や外交の窓口として栄えてきた地域であります。特にその中心的な門戸として発展し、中世には日本を代表する貿易都市となった「博多」は、近年の都市部の再開発に伴う埋蔵文化財の記録保存としての発掘調査が継続的に行われ、現在までに200次の調査を超え、その調査の進展とともに新たな知見が得られています。

本書は、博多区上呉服町地内における共同住宅ビルの建設に伴う博多遺跡群第201次発掘調査について報告するものです。本調査では、飛鳥時代から奈良時代の生活の痕跡や、平安時代後期以降の中世都市「博多」の集落の一部が検出され、飛鳥・奈良時代の遺構の広がりについて新たな知見を得ることができました。これらは、「博多」の歴史や文化の変遷を解明する上で貴重な資料となるものです。

これらの調査成果の報告により、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究資料として、また地域の歴史の学習の材料としてもご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、事業者をはじめとする関係者の方々には、発掘調査から報告書作成にいたるまで、ご理解とご協力を賜りました。心より感謝申し上げます。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会  
教育長 酒井 龍彦

## 例言

1. 本書は、福岡市教育委員会が、平成25年4月8日から同年6月18日まで発掘調査を実施した博多遺跡群第201次調査の報告書である。なお、発掘調査費用負担の一部について国庫補助金を適用している。
2. 発掘調査は、共同住宅ビル建設工事によって遺構が影響を受ける範囲について行っている。
3. 遺構の呼称は記号化し、土坑・土壇墓をSK（用途不明土坑を含む）、溝状遺構をSD、堅穴遺構をSC、井戸址をSE、掘立柱建物をSB、柱穴などピット状遺構をSP、その他の遺構（不明遺構、特殊遺構、近代以降の攪乱）をSXとした。
4. 本書の遺構図に用いる方位北は、特に断りがないものは国土座標北（世界測地系）を用いるが（G.N.）、磁北（M.N.）を用いている場合がある。これらは図中に明示している。磁北は西偏約6°20′であるが、国土座標北からは約6°40′の西偏である。また調査地内の測量座標は敷地の形状に合わせた任意座標としたが、その任意座標の基準とした調査区内の座標杭に、近くにあった国土交通省設置の基準点（都市再生街区基準点）から座標を移動し、国土座標上の位置を求めている。これは世界測地系である。また調査区の標高は、同様に近くにあった国土交通省設置の基準点にあるレベルから移動して用いている。なおこの基準標高は、以前に本市埋蔵文化財課が博多遺跡群に設置した基準点の標高とは若干の相違があり、周囲の過去の調査との対比の際には注意を要する（本文参照）。
5. 本書に用いる遺構図の作成は、調査担当の久住猛雄および坂口剛毅（埋蔵文化財調査課技能員）が主に行ったほか、穂園さやか（当時・福岡大学学生）が行い、調査終盤に埋蔵文化財調査課職員の星野恵美、細石朋希の助力を得た。遺物の実測は、主に土器・陶磁器・石製品について上方高広（埋蔵文化財調査課技能員）が行い、金属製品は朝岡俊也（埋蔵文化財調査課）と久住が行い、一部を久住が補足・修正した。遺物実測図の拓本は小畑貴子（埋蔵文化財調査課整理作業員）が採取した。製図は、遺物実測図は主に上方が行い、金属製品について山崎賀代子（埋蔵文化財調査課技能員）と朝岡が行い、一部久住が修正を含めて行った。遺構図の製図は、山崎と小畑貴子（埋蔵文化財調査課整理作業員）が行い、同様に久住が一部を補足・修正した。
6. 本書に用いる遺構写真は、全て久住が撮影し、デジタル補正を行っている。遺物写真のうち漆製烏帽子は田上勇一郎（埋蔵文化財センター）が、金属製品のX線写真は上角智希（埋蔵文化財センター）が撮影した。なお銅銭の形式同定は上角によるその他の遺物写真は久住が撮影した。
7. 表表紙写真は、（左）本調査第1面・（右）第2面全景（北西から）、裏表紙写真は、（左上）SK521土壇墓（東から）、（右上）SK475土壇墓（南東から）、（左下）SK506・585土器出土状況（北西から）、（右下）2面下SK529およびSX574・1143土器出土状況（南西から）である。
8. 本書の編集と執筆は久住が行った。ただし、動物遺存体については屋山洋（埋蔵文化財調査課）が執筆した。また遺物の分類基準や編年の典拠は本文を参照されたい。

## 本文目次

I. はじめに	1
II. 調査の記録	10
1. 調査の概要	10
2. 検出遺構	12
3. 出土遺物	30
III. 調査のまとめ	32
PL. 1～8	33～40

## I. はじめに

### 1. 調査に至る経緯

福岡市教育委員会は、同市博多区上呉服町 250-1 外地内における、共同住宅ビル建設に伴う埋蔵文化財の有無についての照会を平成 25 年 10 月 24 日付で受理した（事前審査番号 25-2-813）。

これを受け、経済観光文化局文化財部埋蔵文化財審査課事前審査係は、照会地が周知の埋蔵文化財包蔵地である博多遺跡群（分布地図番号 48-0121）に含まれており、周囲の発掘調査および確認調査の成果から、当該地も埋蔵文化財が存在する可能性が高いと判断し、平成 25 年 11 月 21 日に確認調査を実施した。その結果、現地表面下 135～170 cm 前後で中世とみられる遺構と遺物が確認されたことから、遺構（埋蔵文化財）の保全等に関して事業者と協議を行った。

その結果、工事計画はビルの基礎工事において、埋蔵文化財への影響が回避できないことから、工事範囲について、記録保存のための発掘調査を実施することで合意した。そして平成 26 年 3 月 28 日付で建築主である法人を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務に関する委託契約書を締結し、同年 4 月 7 日から 6 月 11 日まで発掘調査を実施することになった。なお調査費用については、当該工事が零細事業者による開発工事であるため、本市の埋蔵文化財発掘調査国庫補助金適用要項に基づき、一定の比率について国庫補助金を適用することになった。

発掘調査は平成 26 年 4 月 8 日に開始した。調査途中で掘削廃土の処理について場外搬出の予定から場内処理に変更となったため、事業者と調査期間について協議した。その結果、若干の調査期間延長について合意し、同年 6 月 18 日に発掘調査を終了した。資料整理および報告書作成は、平成 27 年度に資料整理を行い、平成 28 年 3 月に報告書を刊行することになった。

また、当該調査に関する基本情報は当頁下段の表のとおりである。

### 2. 調査の組織

調査主体：福岡市教育委員会

調査委託：有限会社 ワイティィーディー

（発掘調査 平成 26 年度；資料整理・報告書作成 平成 27 年度）

発掘調査および整理・報告総括：経済観光文化局文化財部埋蔵文化財調査課 課長 常松幹雄

同課調査第 1 係長 吉武 学（平成 26 年度）

同課調査第 2 係長 榎本義嗣（平成 27 年度）

発掘調査および整理・報告庶務：埋蔵文化財審査課管理係 横田 忍

発掘調査および整理・報告担当：埋蔵文化財調査課 久住猛雄

（平成 26 年度調査第 1 係、平成 27 年度調査第 2 係）

#### <調査基本情報>

遺跡名	博多遺跡群	調査次数	201 次	調査略号	HKT-201
調査番号	1402	分布地図図幅名	048 千代博多	遺跡登録番号	020121
申請地面積	262.17㎡	調査対象面積	175.5㎡	調査面積	159.65㎡
調査期間	平成 26（2014）年 4 月 8 日～6 月 18 日			事前審査番号	25-2-813
調査地	福岡市博多区上呉服町 250-1、252-1、253、259-1、260-1、260-2				



## 2. 博多遺跡群の地理的歴史的環境

博多遺跡群は、現在の博多川（那珂川河口部の中洲を挟んだ東側）と石堂川（御笠川）の間の河口部に形成された砂丘上に位置する複合遺跡である。南側は、石堂川の開削（安土桃山時代～江戸時代初期）には、御笠川が那珂川に向かって西流しており、その旧流路（比恵川）によって画されていた。石堂川が無かったそれ以前は、砂丘地形は、遺跡群中央から南部の「博多濱」が現在の御笠川の東側に位置する堅粕遺跡（Fig. 1）と繋がっていた状態であったが、その間には若干の鞍部が形成されていたと考えられる。また北部の「息ノ濱」の東側は海が進入しラグーン状となっていたと想定され、地形上周囲とは画された遺跡群であったと考えられる。発掘調査やその他試掘調査等の成果から、博多濱と息ノ濱はその中央は古代以来繋がっていたものの、息ノ濱と博多濱の間の東西は旧地形が急激に落ち込むことが判明しており、入り江の先端が進入していたとみられる。そこを利用して少なくとも中世には港湾施設があった可能性があるが、入り江が進入していたと想定される箇所での礎石の不時発見などはあるものの、港湾施設の遺構の実態は不明でその解明は今後の課題である。ただ、今回の201次調査のような旧地形が急激に落ち込む場所の近くではその存在可能性が注意されるだろう。

博多遺跡群の遺構の形成は、少なくとも弥生時代早期（突帯文土器期）には始まり、その後近現代までほぼ全ての時代に連続と人間の生活痕跡があり、継続している希有な遺跡である。遺跡は、当初は砂丘上に形成されたが、自然的な砂丘の発達だけでなく砂丘の起伏の間の鞍部の人為的な埋め立てや整地の連続により、土地がかさ上げされ、都市部ではあるが意外にも遺跡は地下に埋もれて遺存している。また一部の神社仏閣などは平安時代以降の中世都市「博多」以来の歴史を今に伝えている。

弥生時代は、少なくとも中期中頃以降は、時期毎の主要な分布域の移動があるものの、後期および終末期まで継続している。中期中頃から中期末には甕棺墓列も形成された。終末期に遺構が増大し、古墳時代初頭から前期中頃は遺構分布と遺構数のピークとなり、弥生時代後期後半からすでにみられる外来系土器の搬入が、古墳初頭～前期前半にはその数量や故地の範囲が広くなり、東は伊勢湾沿岸

や北陸西部、西は朝鮮半島各地（楽浪、馬韓、弁辰韓）にまで及んでいる。古墳初頭から前期中頃にかけては、原料の朝鮮半島産輸入鉄素材の精錬を含む、大鍛冶、小鍛冶までの複合的な鉄器生産センターが博多濱I南部の現在の祇園町の一部に展開しており、その内容は精錬・鍛冶滓の出土量、多数の鞆羽口の出土（断面蒲鉾形主体）、多様な未製品の出土、各種鉄素材の出土から当時の列島では最高レベルの技術と生産量と言える。古墳初頭の列島各地には、点的に同様の技術を持つ鍛冶遺跡が急速に広がるものの、

（注） Fig. 1 の遺跡（周知の埋蔵文化財包蔵地）の範囲は調査の進展により変動があるため、およその範囲を示している。また一部の包蔵地は未記入である。最新の成果により更新された現時点での遺跡範囲については、埋蔵文化財課にて確認願いたい。

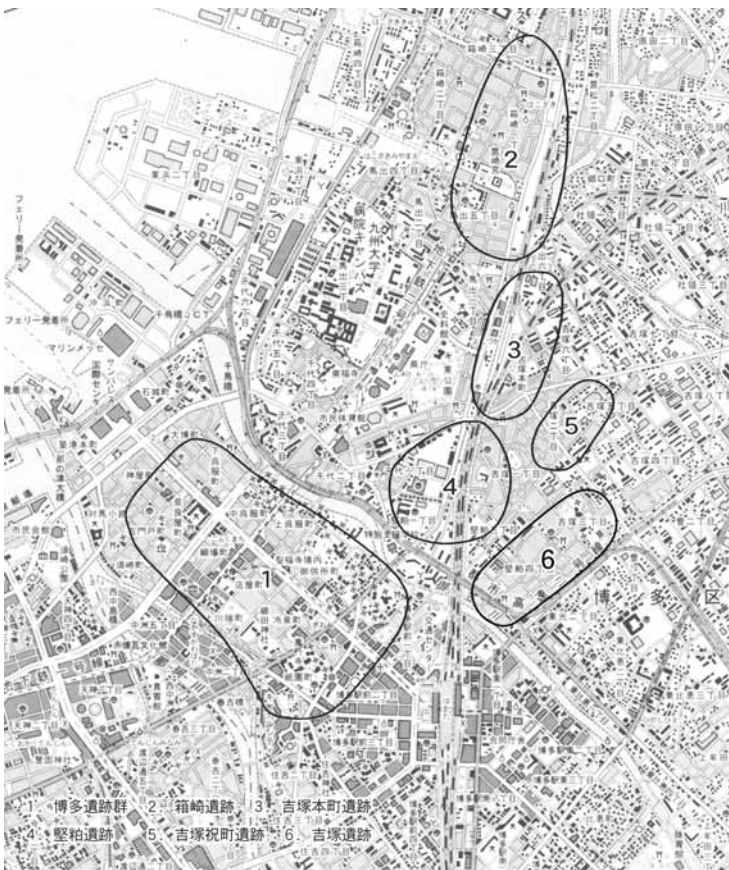


Fig. 1 博多遺跡群の位置と周辺の遺跡 (1/40,000)



他遺跡の遺構範囲や継続性、生産規模は博多とは明らかな差異があり、博多「本店」とするような展開と言える。この頃、博多湾岸のやや西側には、古墳前期前半～中頃に早良区西新町遺跡の遺構が増大し、朝鮮半島各地の土器だけでなく西日本各地の土器が搬入されている。対外交易の一大センターであり鉄素材なども取引された可能性が高いが、その大部分はまず博多に搬入・加工され、各地に製品が流通した可能性もある。この時期、西新町に朝鮮半島系土器が圧倒的に集中するが、博多では一定の搬入がある。「鉄」の取引や、技術交流が背景にあらう。「博多湾貿易」とされる時代であり、後の国際貿易都市「博多」の原点とも言える。その後、前期後葉～末にかけて博多遺跡群の集落遺構と遺物は減少し、鉄器生産センターも衰退・廃絶したとみられる。同じ頃、西新町では前期中頃から後葉にかけて遺構が減少し、前期末には集落遺構がほぼ消滅する。対外交易（貿易）のネットワークが、いくつかの理由により変化したためであらう。博多ではその後、古墳前期末から中期、後期（須恵器のTK43まで）いっぱいにかけて集落遺構は不明確であり、遺物は出土するため小規模集落が続いたとみられるが、交易拠点としては機能していない。その頃（古墳中期～後期）には、中期前葉には、「博多濱Ⅰ」砂丘中央に有黒斑で赤彩埴輪が多く葺石も完備する全長56m前後の博多1号墳、博多濱Ⅰの西側で括れ部らしき溝が検出（142次）され前方後円墳が推定され、周辺に無黒斑埴輪が多く出土する中期後葉の博多3号墳（仮称）、また博多濱Ⅰ東部でも一部須恵質でB種ヨコハゲが多い中期末の円筒埴輪が伴う全長33m前後の博多2号墳があり、同じ地点では後期の埴輪もありもう1基の有力古墳の存在も推定される。さらに後期後半には未検証だが博多濱Ⅰ中央南西にも大型古墳周溝の



Fig. 2 博多遺跡群における発掘調査地点と201次調査の位置 (1/10,000)

可能性がある落ち込みがある（166次）。他にも複数の地点で小石室ないし石棺墓や石蓋土墳墓などが見つかり、小型古墳の存在も推定でき、「博多古墳群」とも言える。さらに、まだ集落が盛行している前期は、大小の方形周溝墓や甕棺・壺棺が博多濱Ⅰ・Ⅱの複数地点に存在する。以上のように、古墳時代中期から後期は墳墓が主体で、集落としては散在的、散発的であったらしい。同じ時期では、御笠川を挟んだ東方の砂丘最後列に位置する吉塚遺跡（Fig. 1）に継続的な集落遺跡の展開がある。ところが、後期後半からにわかに集落関連遺構が博多濱Ⅰの縁辺部に形成されたようであり、飛鳥時代前半期あたる北部九州須恵器編年Ⅳ期（6世紀末～7世紀中頃）には、博多濱ⅠとⅡ南半一帯に遺構と遺物が分布するに至る。この状況は、古墳前期前半の様相にやや近い。これは南東後背1kmに位置する比恵・那珂遺跡群において、「那津官家」や「筑紫大宰」に関わるとされる倉庫群（比恵）や初期瓦を伴う建物群や区画溝（那珂）が展開する様相と密接に関わり、その港湾的機能としての集落形成の可能性がある。須恵器Ⅳ～Ⅴ期に相当する時期には、飛鳥Ⅰ・Ⅱ期に相当する飛鳥・難波系（宮都系）の暗文土師器坏・高坏が少ないながらも複数搬入され（33・166・203次）、新羅土器もあり（33次）、さらに国内唯一の高句麗土器の搬入（17次）はこの時期の末か次期の初めであろう。次のⅤ～Ⅵ期（7世紀第3四半期～700年前後）の遺構の展開は博多濱Ⅱでは減少するが、

後に正方位の区画溝を伴う官衙遺構が中央に形成される博多濱Ⅰ砂丘周囲には遺構が引き続き展開し、宮都系暗文土師器（飛鳥Ⅲ～Ⅳ期）の搬入が増加する。精製の宮都系暗文土師器は飛鳥Ⅳ～Ⅴおよび平城Ⅰ・Ⅱ併行にかけて博多では最も多く搬入され、最近の検討では大宰府よりもはるかに多いことが判明しつつある。同時期には、博多の西方の警固丘陵に「筑紫館」（「鴻臚館」の初期）が7世紀後半に造営されており、奈良時代にかけて、外交・貿易の筑紫館と、国内交易の中継点としての博多という図式が得られる。大宰府からの二つの「官道」（水城東門・西門ルート）が、その両者に延びているのは意味があろう。



Fig. 3 博多遺跡群 201次調査地点の位置と周辺の調査 (1/750)

次に奈良時代初頭になると、現在の祇園町交差点を中心とする博多濱砂丘Ⅰの中央部に、約100mの一町四方の区画溝で囲まれる形で造営され、その地割は中世初期の貿易都市博多の初期段階（～13世紀初頭頃）まで影響している。この内部には、大型柱穴を有する掘立柱建物もあり、井戸の検出も多い。越州窯青磁も多く、官服を飾る袴帯（帯金具・石帯）、長沙窯水注・イスラム陶器のような鴻臚館珍しい陶磁器も出土する。この官衙域の北西一帯（博多濱Ⅰ北部～西部、博多濱Ⅱ）でも、奈良～平安時代前期の井戸・竪穴建物・掘立柱建物・工房（鍛冶・銅）・土壇墓が点在し、袴帯や「長官」「佐」という官職名の墨書土器、硯（円面硯・転用硯）が出土し、官衙に関わる官人層の居住域だろう。博多濱Ⅰ・Ⅱの広域において、和銅開珎以下の皇朝十二銭、宮都系土師器、権衡具の出土があり、官衙であることは間違いなく、一説に言う鴻臚館（筑紫館が9世紀前半に改称）の分館としての「鴻臚中島館」とする見解も検討課題である。筑紫館（鴻臚館）と博多は、入江一つしか隔たれていない。鴻臚館に大量に搬入された初期貿易陶磁器は、博多でも比較的多く、大宰府に入って各地に行くものと、博多に入って各地に行くものがあつた可能性も考慮される。一方、鴻臚館は11世紀中頃の焼失を契機に衰亡するとされ、同時に博多が中世貿易都市として台頭するのだが、その急速な貿易拠点機能の移行が可能であつたのはその前史があつたのであろう。本報告の201次における飛鳥時代後期から奈良時代の遺構分布は、博多濱Ⅱで最も北東にあり、当該期の分布の北限となる。地形的に調査区北半に砂丘の小ピークがあり、その北側で入江に向けて急に下がる地点であつたと考えられる。一つの可能性として、201次調査の北側に、すでに当該期に小規模な港湾施設が存在した可能性を提起したい。今後の調査課題であらう。

なお以下、11世紀後半以降の「中世都市博多」の展開は、他の「博多」の調査報告書の「歴史的環境」の項目や概説書に詳細に述べられており、本報告では割愛する。

### 3. 201次地点の周辺の調査

本報告の201次周囲では（Fig. 4）、北側前面道路を挟んで北に132次（福岡市埋蔵文化財調査報告書第805集）があり、道路の北東側に164次（同第992集）がある。この前面道路は、「西門通り」と呼称され、北東で石堂川を渡る端は「西門橋」と呼称される。石堂川から博多遺跡群中央に向かって今も基盤砂丘以来の明確な高低差が残り、かつて「富士見坂」と呼ばれていた。201次と132次地点の間で最も高くなり、これより南西側では高低差が顕著でなくなる。132次の北東側小路は南西に向かって顕著に低くなり、これも旧地形をそのまま残す。132次では、調査区南西側で標高3.2m（現行の測量基準だと3.9mか、註1）付近で、近世の客土とされた黒褐色粘質土（a・b層）があり、これを除去したやや質の異なる黒褐色粘質土（c層）の上面が13～14世紀の

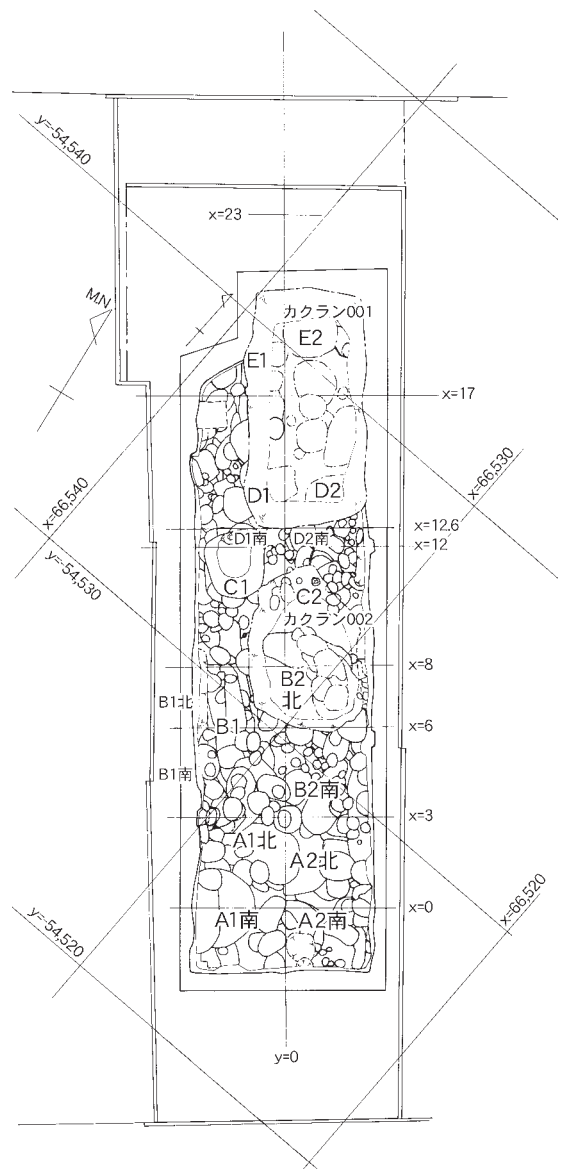


Fig. 4 調査区の座標とグリッド図 (1/250)



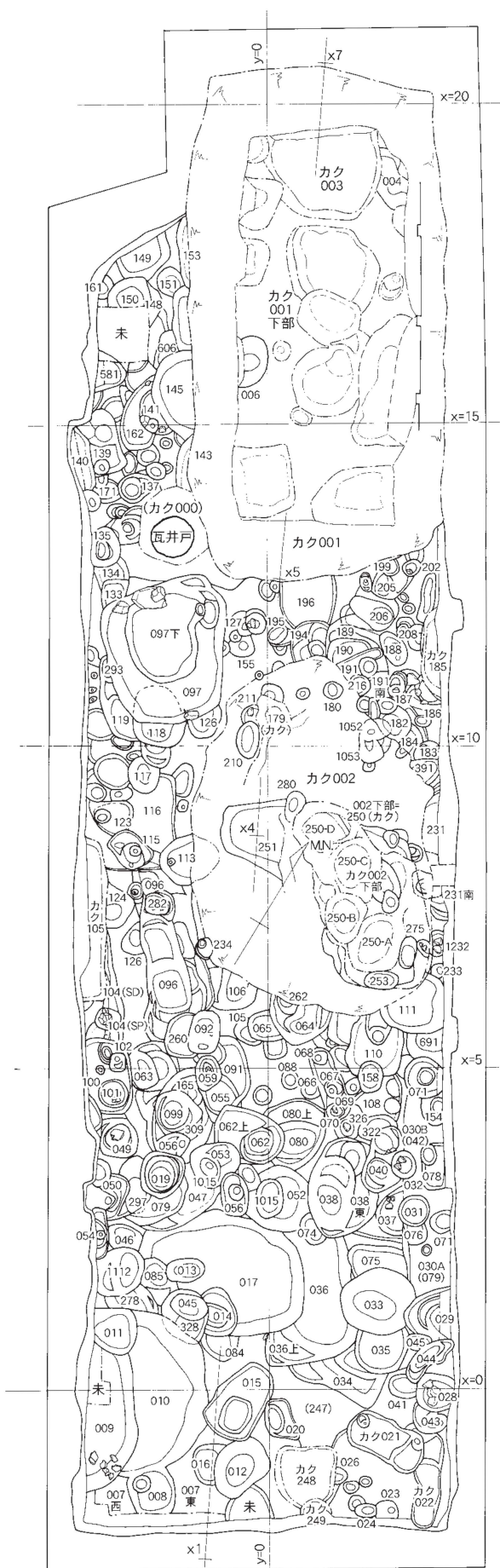


Fig. 5 第1面全体図 (1/100)

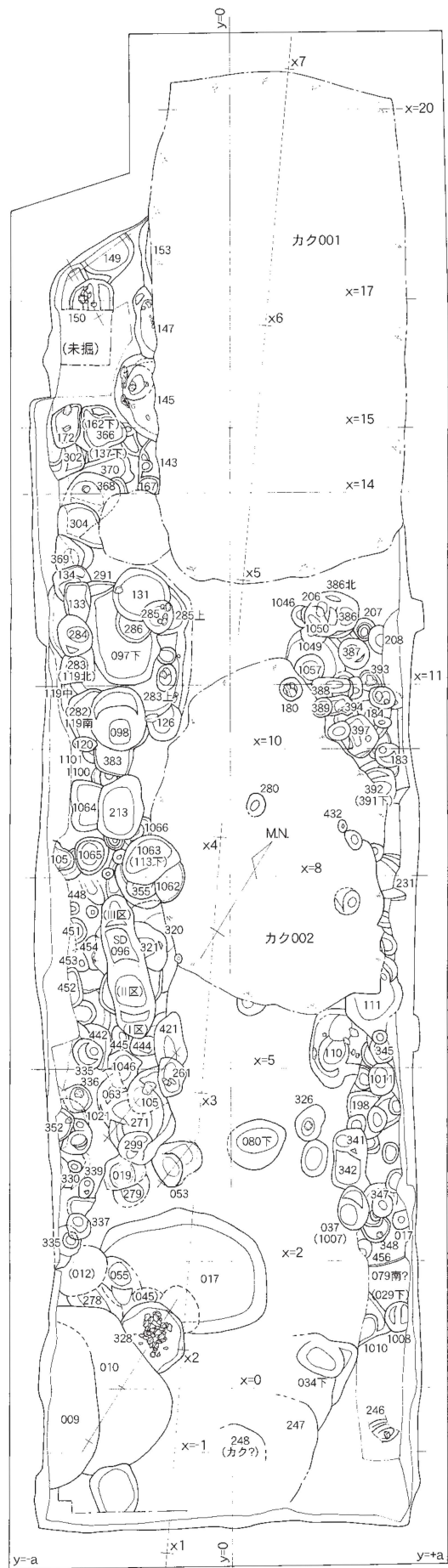


Fig. 6 第1面下部全体図 (1/100)

遺構面であり、そのc層はそれら遺構群形成の直前の整地層と判断されている。遺構面は北東部に傾斜して低くなり、標高2.5m(同様に3.2mか)となる。この遺構面の下は、南西側では黄褐色砂と黒褐色粘質土の互層があり、その下に黄褐色砂・暗褐色砂などの砂主体の埋め立て層が南西から北東

に向かって何層もあることが判明している。低くなる北東側には中間の黄褐色砂・黒褐色土の互層は無く、砂層埋め立て層となる。これら下部では、南東側では標高2.1m(同様に2.8mか)で砂丘上面とみられる明褐色砂となり、北東側では南西側と異なる水成堆積の明褐色砂上面が標高1.0mから北端0.5m(同様に1.7~1.2mか)である。北東部はこの上に黒褐色粘質土の水成堆積がある。これらの状況は、元々急激に落ち込む地形に、ある時点で

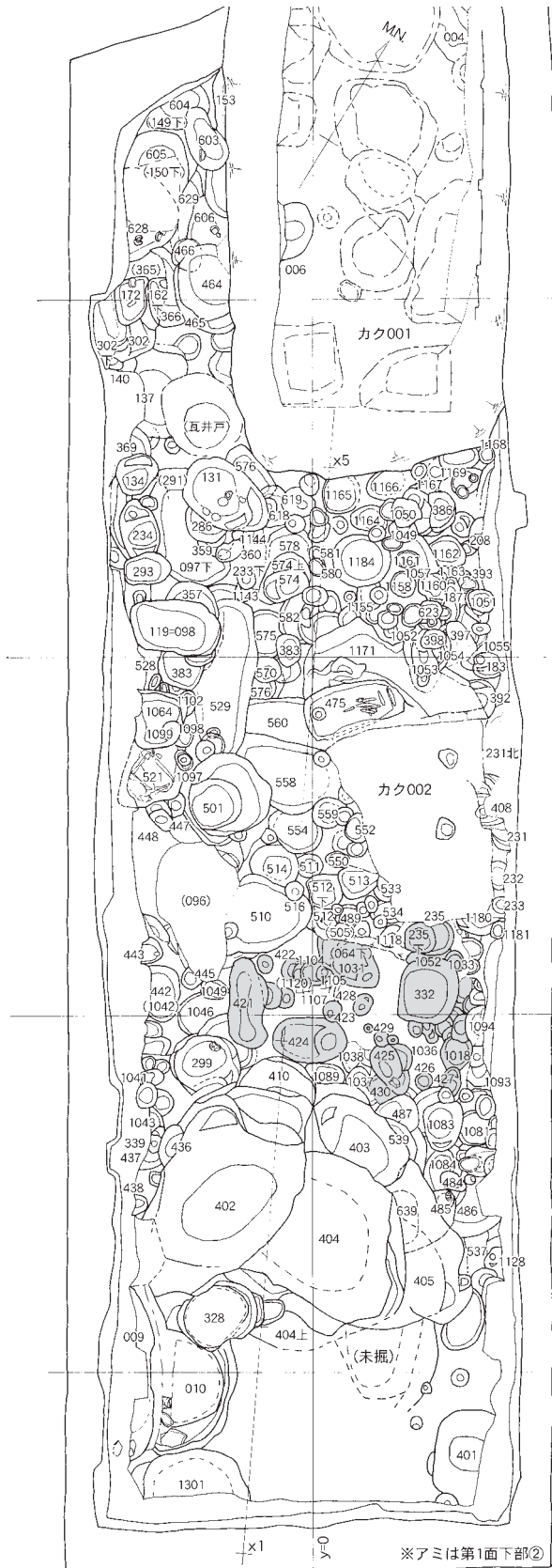


Fig. 7 第1面下部～第2面全体図 (1/100)

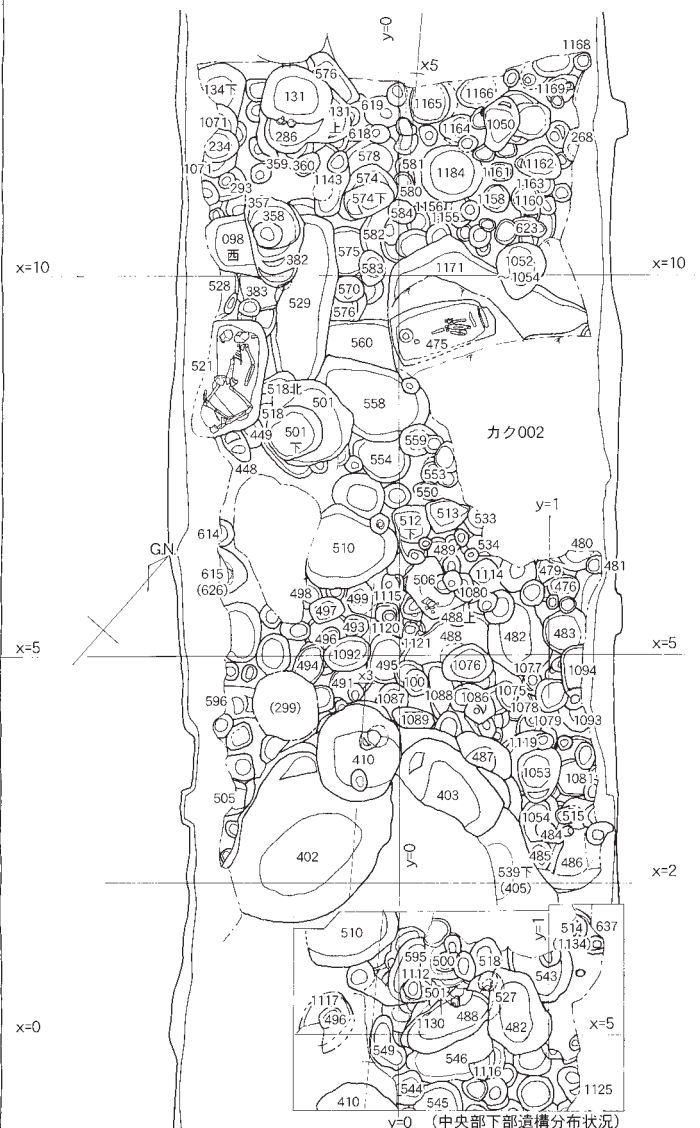


Fig. 8 第2面下部①遺構分布図 (1/100)

砂主体の埋め立てがあり、13世紀（中頃～後半？）以降にその上部を整地し（「2層」、生活域を広げたことを示す。さらに14世紀まで遺構が継続するが、15～16世紀の遺構・遺物は減少する。なお遊離遺物だが、132次報告の図35-779は古墳時代中期前葉～中頃の韓式系軟質土器小型深鉢（百済系？）であり、博多遺跡群に伴うならば、博多1号墳の前後であり注目される。

164次は、201次の北30m、132次の北西20mにある。第1面の「黒色系砂質土」は、標高1.6m前後（測量基準が132次と同じ旧基準で、同様に2.3mか）であるが、17世紀前半埋没とする溝SD-68の上であり、それ以降の埋め立て整地層だろう。132次の上部「黒褐色粘質土」と対応する。第2面は調査区東側（「南東側」とすべき）と西側で異なるが、「褐色砂」上面で標高1.6～1.35m（同様に2.3～2.05mか）とする。この褐色砂の途中で東側は「第3面」があり標高1.3m、これらの下部に基盤砂丘層があり、東側が標高1.45m（2.15mか）、平均的には1.35m（2.05mか）、南側（南東側）が1.1m（1.8mか）と最も低くなり、これは現在の地形傾斜と逆になる。地形変遷が単純ではなかったことを示す。この「基盤砂丘」上面を、西側では「第2面」、東側では「第4面」とする。最下面（西側「第2面」、東側「第4面」）の遺構は13世紀中頃～後半からで、東側の「第3面」までの遺構は14世紀までである。また「第2面」検出の屈曲するSD-68は15世紀後半～16世紀前半の掘削とされ、さらに調査区北部（SD-68北側）の検出遺構は「全て17世紀代」とされる（ただし、SK80などは16世紀後半か）。164次では、13世紀中頃～14世紀に南東側に遺構があるが、それ以後は一時なく、15世紀後半以降に土地区画溝があるが遺構は少なく、17世紀初頭以後に遺構形成が本格化しており、132次に近い変遷である。一方、これら132・164次の遺構形成時期とその変遷や遺構面形成の状況は、本報告の201次とは大きく異なることが注意される。

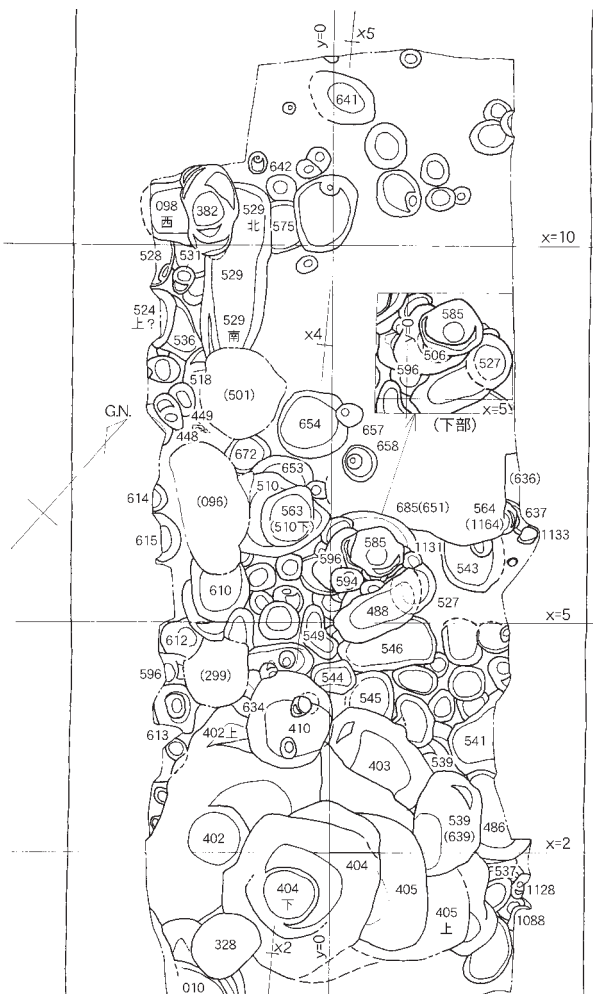


Fig. 9 第2面下部②～第3面遺構分布図 (1/100)

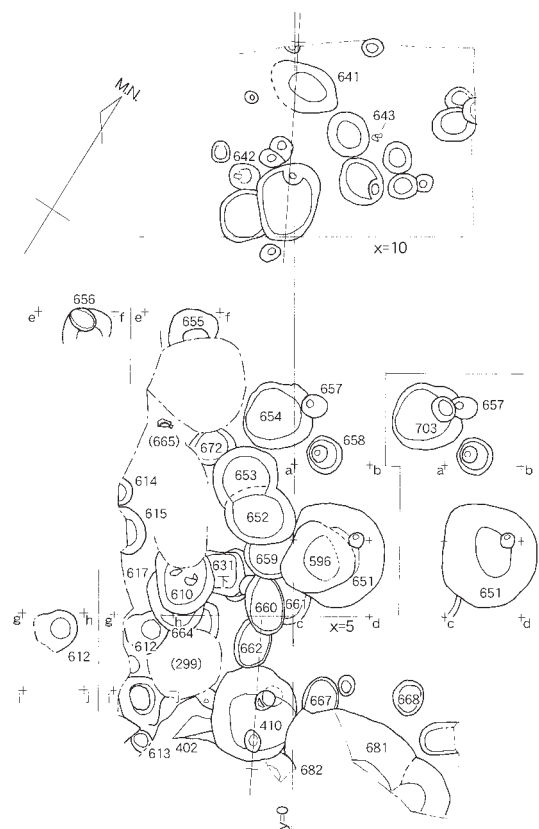


Fig. 10 第3面遺構分布図 (1/100)

(註1) 132次では、旧日本測地系による『博多地区遺跡基準点測量委託測量成果簿』（埋蔵文化課委託）



の成果（1992年測量）を利用したとされ、明記されないが標高水準点もその成果の利用だろう。164次も同様である。201次調査開始時に、現在の世界測地系による国土交通省設置「都市再生街区基準点」の標高と、前述の「博多地区遺跡基準点」の標高を比較したところ（調査区前の同一点に両者からレベル移動）、前者（国土交通省）の水準点レベルが後者の旧水準点よりも、ほぼ70cm高いことが判明した。これは世界測地系導入による標高基準変更によるものであろうが、今後調査区間の遺構面比較や旧地形復元の際には注意すべきである。またそのレベル差も再検証されたい。

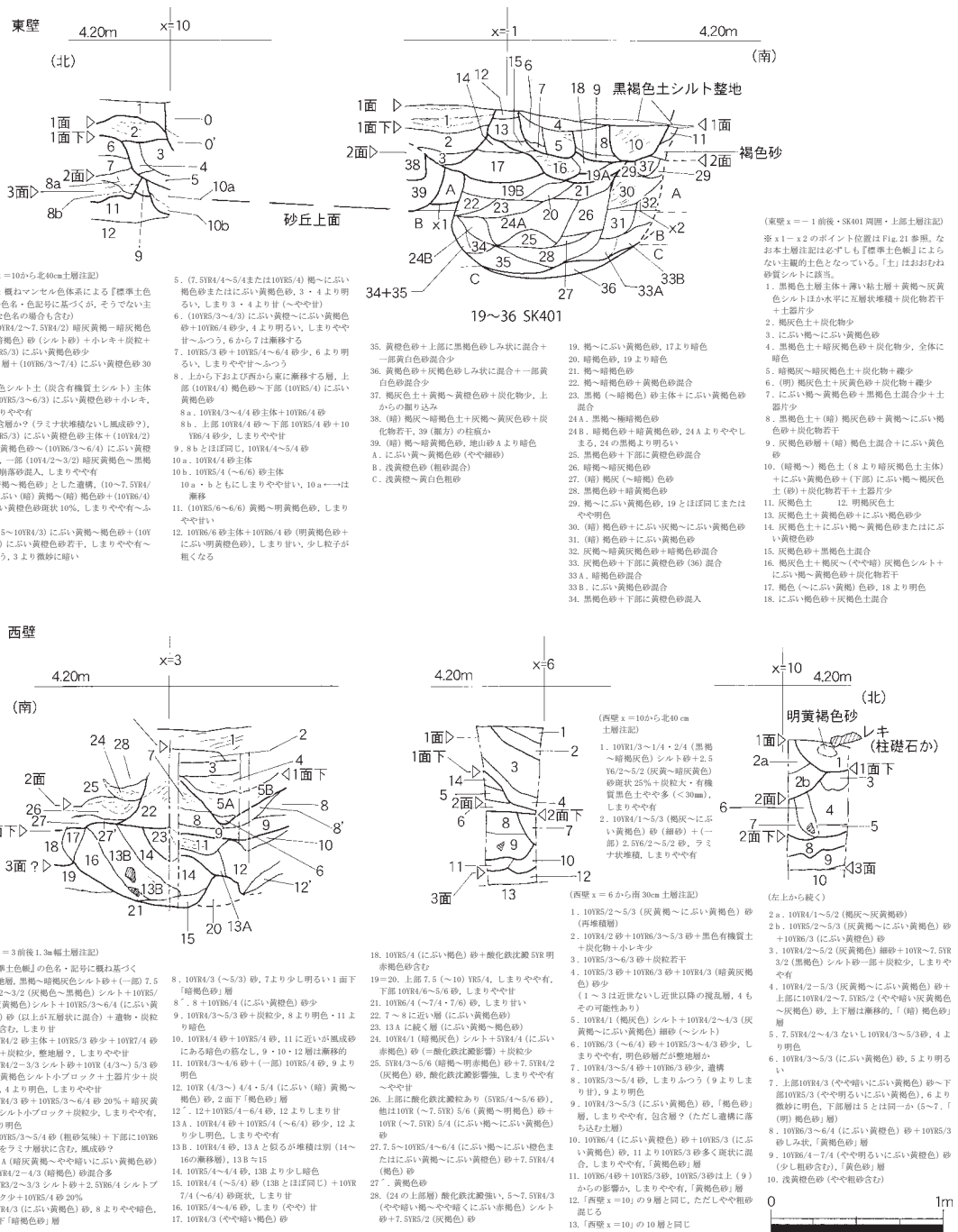


Fig. 11 調査区壁面土層図 (1/40)



Ph. 1 1面調査風景 (南東から)



Ph. 2 中央SX002攪乱 (東から)

II. 調査の記録

1. 調査の概要

201 次地点は遺跡群中央の「博多濱」砂丘第 2 列の北東側に位置し、調査区の中では敷地西側の中央から南西隅がやや高くなるものの、前に述べたように、北西側前面道路に接する北側は下がり始める。また調査区の東側もやや低くなり、南東側もやや低くなる地形の現況である。敷地内の標高は(国土交通省設置の世界測地系「都市再街区基準点」によるため、従来の日本測地系に基づく測量成果の標高水準とは、前項のようほぼ 70cm 異なっている＝現行の基準点にある水準標高の方がほぼ 70cm 高いため注意)、北西側が周囲標高は 4.7～4.5 m (南西に高く北東に低い)、調査区中央の西側は 5.1 m、同じく東側

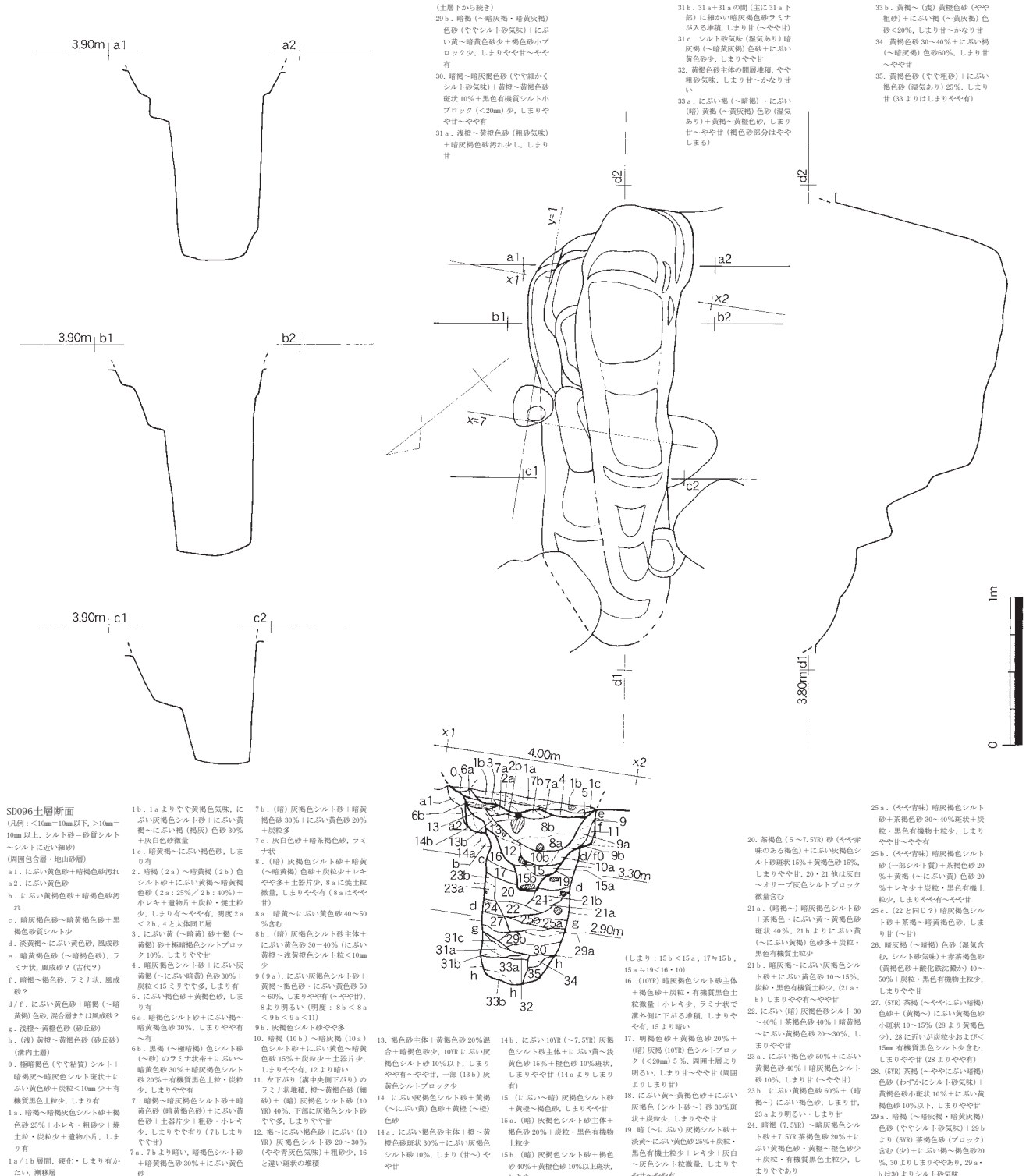


Fig. 12 SD096 実測図・土層図 (1/40)

は4.8m、調査区南東では西側が5.1m、東側が4.9mである。ただし後述するように、調査区内での中世まで地形のピークは北寄りにあったとみられる。調査開始時には、第1面を試掘報告や132次調査成果からGL-130cm前後の標高3.8m（旧標高基準だと約3.1m前後）で中世中頃の面と考えていたが、調査区北端に大きな旧基礎カク乱（カクラン001）と中央に大きな攪乱（カクラン002）があり、調査区北半分から中央北部までは両者が連結するような形で近代以降の攪乱の影響がおよんでおり、上位の遺構面がほとんど失われていたということがあり、第1面の設定は当初想定よりもわずかに下がっている。調査区南半分もこれと同じレベルで重機による鋤取りを止めている。重機による鋤取り終了時点では、まだ攪乱の影響が残り、かつ遺構プランが明瞭でない状況であったので、調査区周囲に幅50cm前後の犬走りや安全と土層観察のため残し（設置矢板がH鋼と横矢板によるため、シートパイル矢板のように端ギリギリまで掘ることはできない）、その内側を「1面上包含層」として若干下げながら遺構検出を行ったため、最終結果として、第1面を標高3.6~3.8mとした。南東端はやや下がった3.5~3.6mを第1面とした。

調査区北半ではすでに一部で古代のやや暗い褐色砂丘上面となり、遺構の間の褐色砂包含層に古代前期（奈良時代）の遺物が認められる状況であったが、南半は中世の遺構が重複して基準面が不明であった（調査区の壁面土層はFig. 11参照）。第1面（Fig. 5）では主に13世紀以降の土坑、井戸上部、柱穴などが多数検出した。以下、遺構群を下げるたびに下から新たに遺構群が現れ、その都度グリッドごとに調査した。グリッドの設定は、調査区中央に「X=0」とする任意座標系を設定し、南東側から北西側へ5mないし4mごとにA~E区とし、また中央「X=0」軸西側を「1区」、東側を「2区」とし、その組み合わせで行っている（Fig. 5）。さて第1面以下、包含層を下げて遺構群が現れるたび遺構面をグリッドごとに設定して記録（図化）を行っているため、「第1面下部」（Fig. 6）や「第2面下部」（Fig. 8・9）という遺構面を、最終的に図面整理により設定している。「第2面」とする面も、その全体写真（PL. 2）と図面整理の結果の「第2面」遺構分布図（Fig. 7）は多少異なっている。最終面までの途中で、奈良時代および11~13世紀の土坑、井戸、柱穴、土壇墓など多数の遺構を検出した（「第2面」および「第2面下部①②」、Fig. 7~9）。なお「第2面」ないし「第2面下部①」では、12世紀前後の土壇墓を少なくとも3基検出している。「第2面」は、調査区北部で褐色砂上面（当初の褐色砂よりやや明るい）であるが、南東側は標高3.2m、北西側は3.5m前である。南東側は一部を除いて激しい遺構重複により砂丘面が不明な部分が多かった。褐色砂上面は第2面の褐色砂中では何度か遺構検出を行い（「第2面下部①」「第2面下部②」）、最終的に図面整理で同一面を整理している（Fig. 8・9）。これら「第2面下部」では、奈良時代の遺構（遺構プラン不明の土器群も含む）を多く検出している。ただし「第2面」の図には、実際には「第1面下部」に相当する遺構を同一図に入れざるを得なかったり（Fig. 6のアミカケ部分）、また「第2面下部②」と「第3面」（Fig. 9・10）は実際には同一面の遺構と考えられる。褐色砂面を少し下げた浅黄橙色砂（やや粗砂を含む）上面、北西側で標高3.2m、南東側で3.0mの面を最終面として遺構検出をしたが、これらは上部の「第2面下部」で土色が不明瞭で検出できなかった遺構群と考えられるものである。これを「第3面」（Fig. 10）とし、飛鳥・奈良時代の土坑・柱穴や遺構プラン不明の土器群を検出した。なお「第2面下部」から「第3面」検出の飛鳥時代後半か奈良時代の長楕円形状土坑には、完形の須恵器坏身が単独で出土したり、赤色顔料が付いた坏蓋が出土するものがあり、いくつかは土壇墓の可能性もある。また土師器の甕が破碎され、土坑中位で下のピットの「蓋」状に置かれたSK506=585なども墓の可能性があろう。

遺物はパンケース35箱分が出土したが博多としては少ない。飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器、平安時代後期から室町時代の土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器・輸入陶磁器・国産陶器、銅銭、銅製品、鉄製品がある。土壇墓等から人骨が、他の遺構から獣骨が出土した（獣骨については32頁「(7)」



博多遺跡群第201次調査出土の動物遺存体」参照)。また烏帽子の可能性のある漆製品が土壌墓から出土しているが、同様な例は全国的にも比較的少ないとみられる。

本報告の博多201次調査では、周囲調査(132・164次など)からの当初の予想に反し、多くの遺構が重層的に検出されたものの、遺物が少なかったのは中世都市の縁辺部であることを示すだろう。ただし遺構は多い。中世前期の土壌墓群の存在は街場の縁辺部であったためであろうか。調査区南東側には、全掘できていないものが多いが、中世の井戸群が想定され、おそらく今の前面道路(西門通り)に重なる街区を画す小路があり、そこから長い長方形(短冊形)の屋敷地があって、その奥(ここでは南東側)に井戸が集中するというパターンとして認められるのではないだろうか。これについては、東西隣地の今後の調査により検証されるべき事項である。なお遺物量や調査面積の割には、銅銭(36枚)がやや多い印象がある。本調査は、博多遺跡群における砂丘の形成過程や旧地形の変遷、中世都市博多の街場の構造、古代の遺構群の分布などについて、今までの想定の一部を見直すべき成果となった。

## 2. 検出遺構

以下、紙幅の都合もあり、主要な遺構(遺物が一括出土した遺構、井戸や大型土坑などの大きな遺構、区画溝、土壌墓などの特殊な遺構、第2面以下の古代遺構など)について報告する。報告記述すべき遺構が他にもあるが、ご了承されたい。また報告する各遺構の記述も詳しい説明ができないが、挿図に比較的詳しい情報を入れ込んでいるので(Fig. 12~21)、挿図と報告記述の両者を参照されたい。なお遺物の報告は、整理作業の都合上から、報告すべき遺構の抽出と、図化遺物(Fig. 22~30)の抽出を分けて行ったため、報告した遺構の出土遺物を必ずしも十分に図化していない場合があり、逆に図化遺物の出土遺構のいくつかは、以下で報告していない。ご寛恕を請う。

以下の遺物報告は、おおむね第1面から第3面検出の遺構順とするが、一部前後するものがある。

### ・SD096 (Fig. 12、PL. 5-1~4)

第1面B1グリッドで検出した溝状遺構。第1面(Fig. 5)で検出しているが、重複遺構が多く、第1面下部(Fig. 6)で全体を把握できた。長軸約300cm×幅90~100cm、深さ(検出面から)130cm。方位は、N(国土座標軸)-50°-E。長軸の南東側の壁は比較的急に立ち上がり、北西側は段々と立ち上がる。ただし北東側に広がるのは古いやや幅広の深さ30~50cmの溝で、土層観察から、これを掘り直して中位での幅が60cm前後の細く深い溝とした可能性が高いと判断する。その細くなった溝も、埋没途中で何度も掘り直しされた痕跡が土層に観察される。覆土については土層注記を参照されたい。出土遺物(Fig. 26-6-15、27-2、9)から、13~14世紀の溝であろう。

### ・SK149 (Fig. 13左、Ph. 3-3)

第1面E1グリッド検出。南北約80cm×東西85cm以上の不整楕円形土坑。深さ35cm。中層~下層に南側から遺物(礫、土器・陶磁器など)を一括廃棄。出土遺物(Fig. 22~16など)から、13世紀頃か。

### ・SK150 (Fig. 13右、PL. 6-3、5)

第1面D1北・E1グリッド検出。南北約60cm×東西45cm以上不整形土坑。深さ40cm。中層から上層に遺物が一括出土。土器・陶磁器の他に、礫、炭化物、有機質由来の黒色粘質土、また獣骨片があった。廃棄土坑か。調査の都合から、遺構東半部分に階段を設置していたため完掘できていない。出土遺物(Fig. 22-17など)から、14世紀頃か。

### ・SK154 (Fig. 14左上、Ph. 3-1)

第1面D1グリッド検出。南北約135cm×東西65cm以上の推定円形土坑(北東側はカクラン001に切られる)。深さ35cm。全体に、炭化物を含む有機質由来の黒色粘質土(一部綿状になるもので、何

かの腐食物を含むと考えられる)の覆土が多く、土器・陶磁器、礫の他、獣骨片なども含む廃棄土坑。出土遺物 (Fig. 22-15など) から、13世紀頃の遺構。

・SK464 (Fig. 14 左上)

SK145 の下部の第2面で検出。SK606が第1面下部で検出されているが、重複関係は、606→SP466→464→145。南北推定約130cm×東西80cm以上。東側はカクラン001に切られる。深さは第2面から70cmだが、本来は第1面からの可能性があり、その場合90cm強となる。出土遺物 (Fig. 22-33など) から、12世紀後半～13世紀前半の遺構。

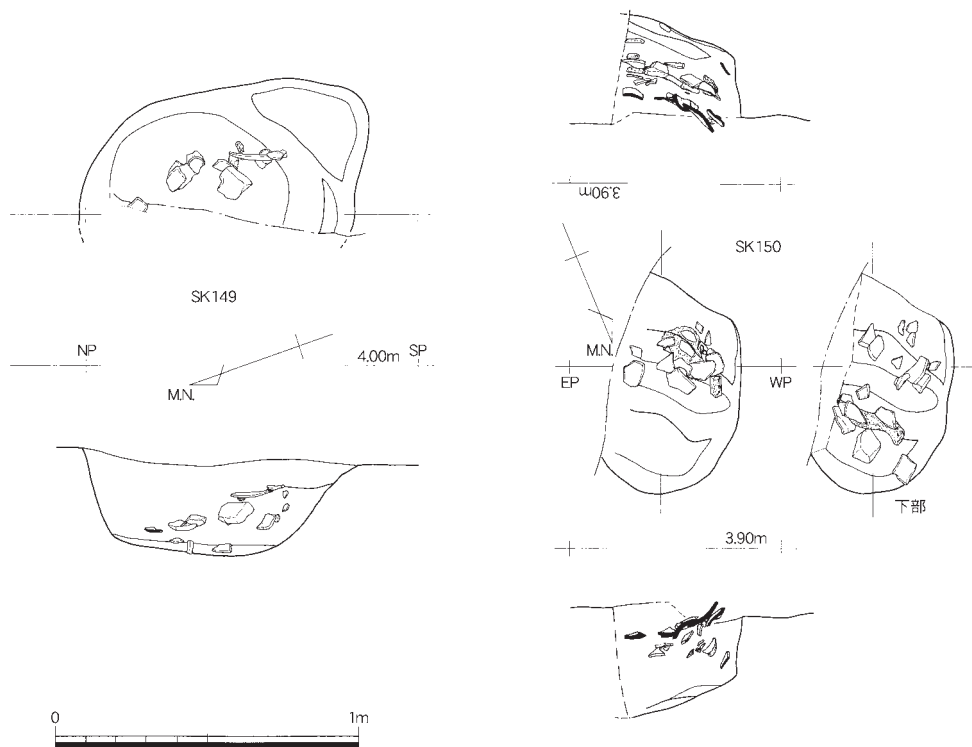
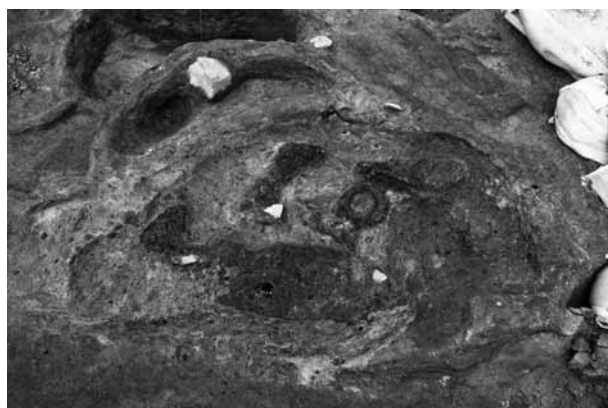


Fig. 13 SK149・150 実測図 (1/25)



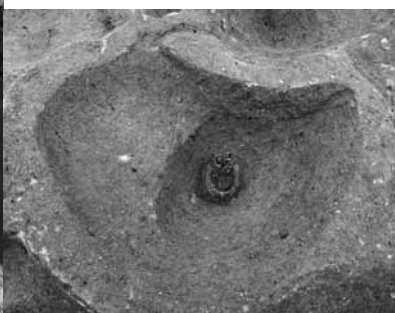
1. SK145 検出状況 (東から)



2. SK110 遺物出土状況 (東から)



3. SK149 (北西から)



4. SK053 骨? 出土状況 (西から)



5. SP028 (西から)

Ph. 3 第1面遺構写真補遺 (他はPL. 1～を参照)

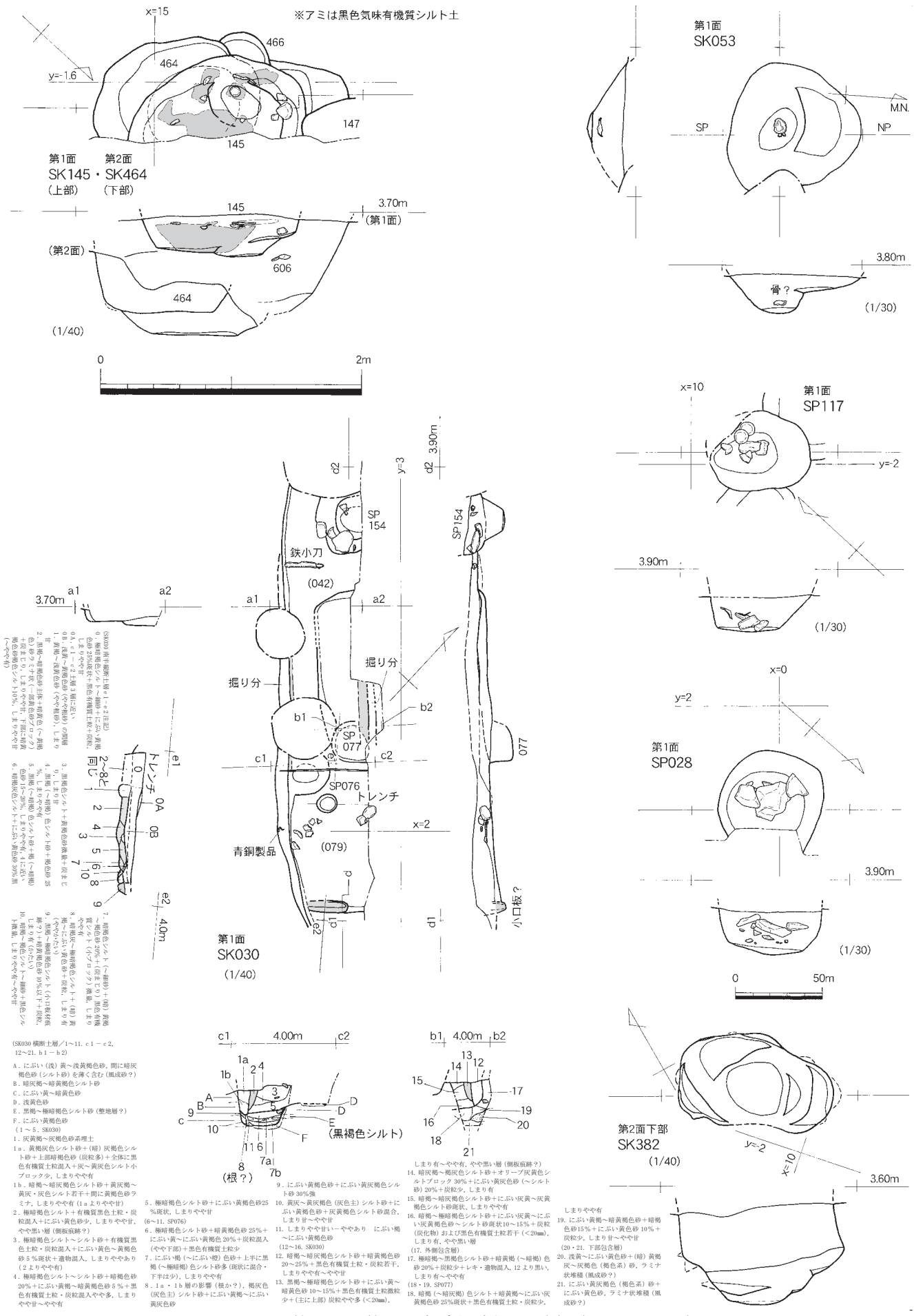


Fig. 14 第1面～第2面各遺構実測図 (1) (1/40, 1/30)



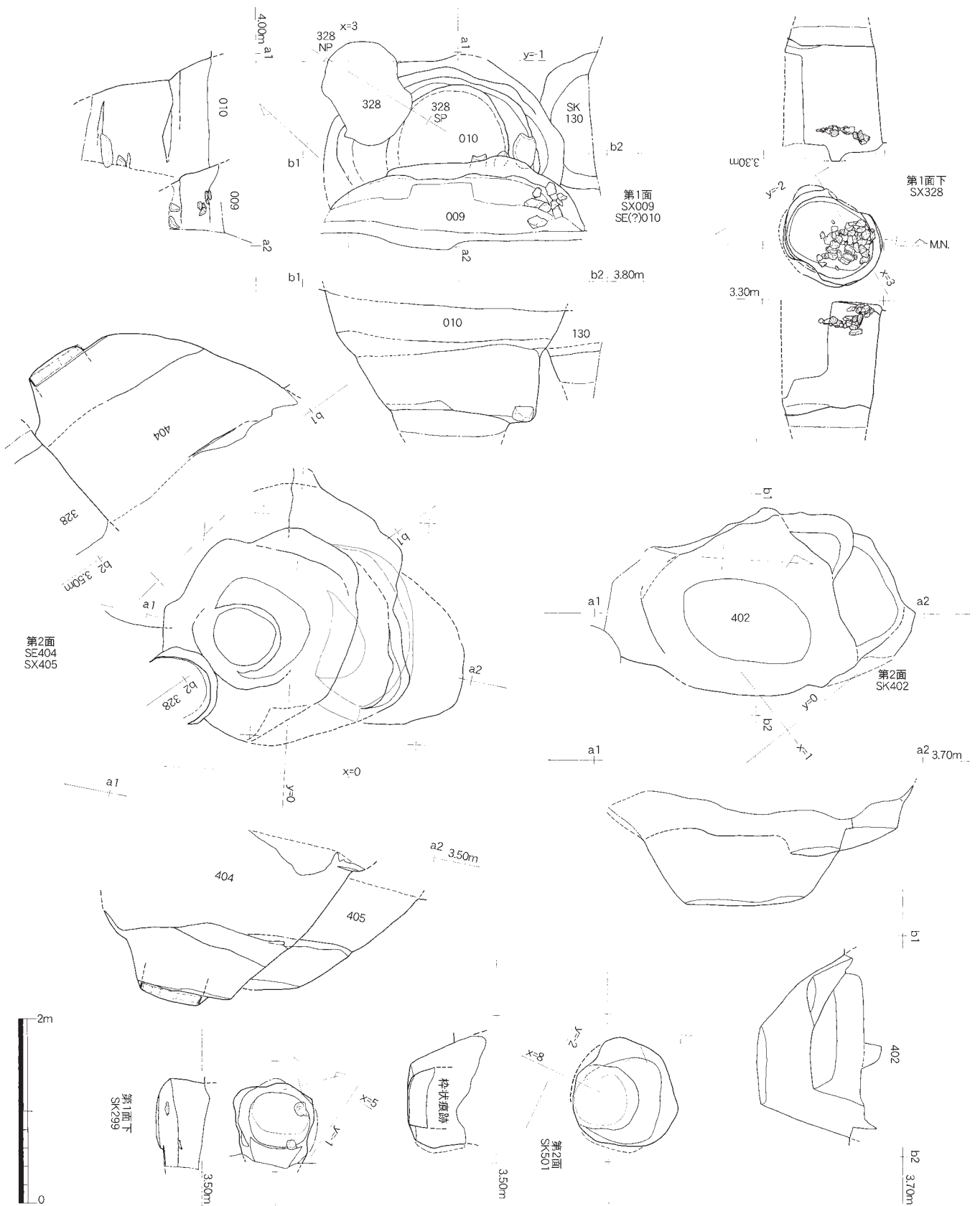


Fig. 15 第1面～第2面各遺構実測図 (2) (1/60)

・SK030 (Fig. 14 左下, PL. 4-6, 7)

第1面 B2 南～A1 北グリッド東側で検出。北端と南端が分からないが、南端は小口板状の痕跡がある。略南北約 330cm + α × 東西 75cm の長方形掘り方だが、当初は約 60cm 幅で検出。精査すると、

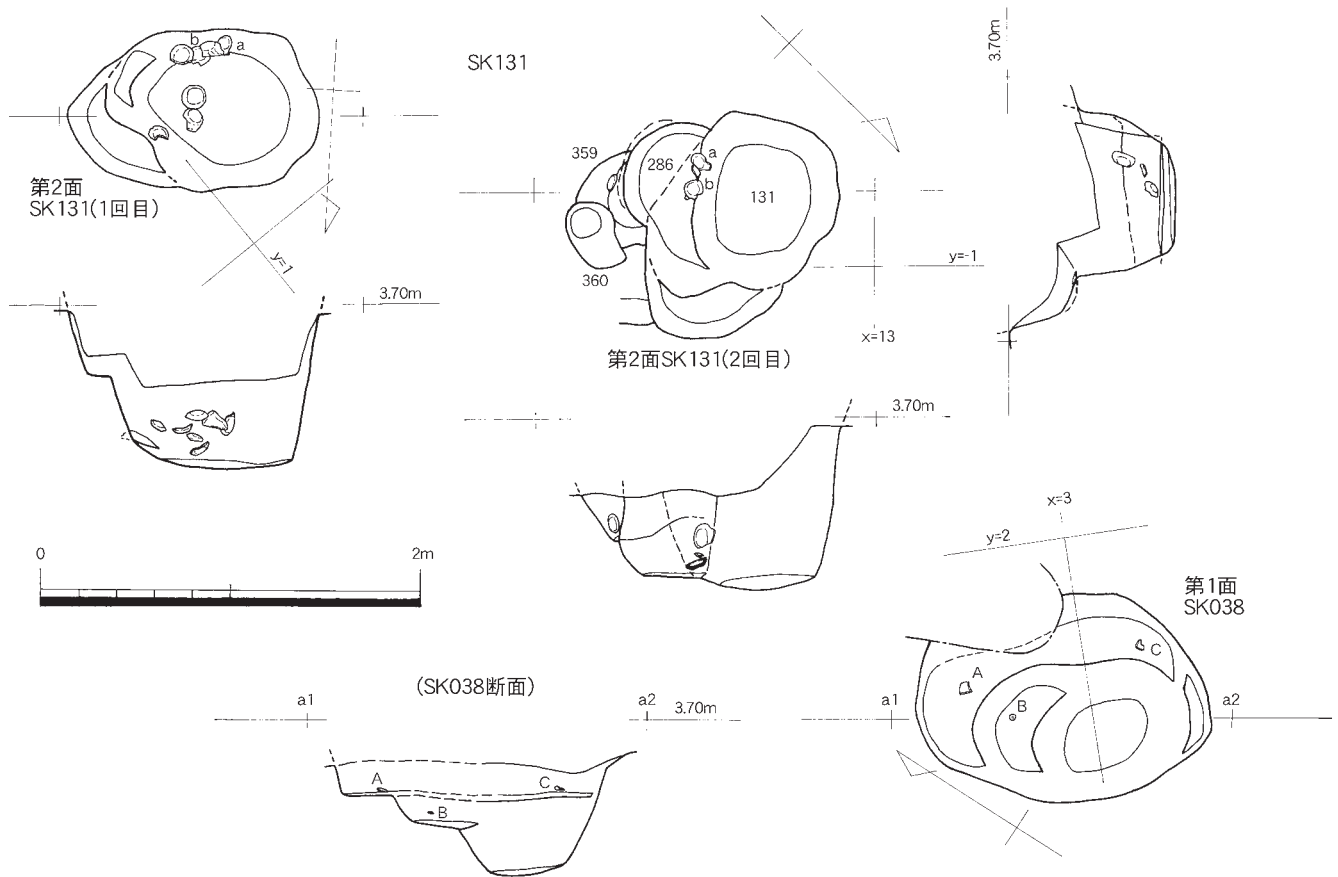


Fig. 16 第1面～第2面各遺構実測図 (3) (1/40)

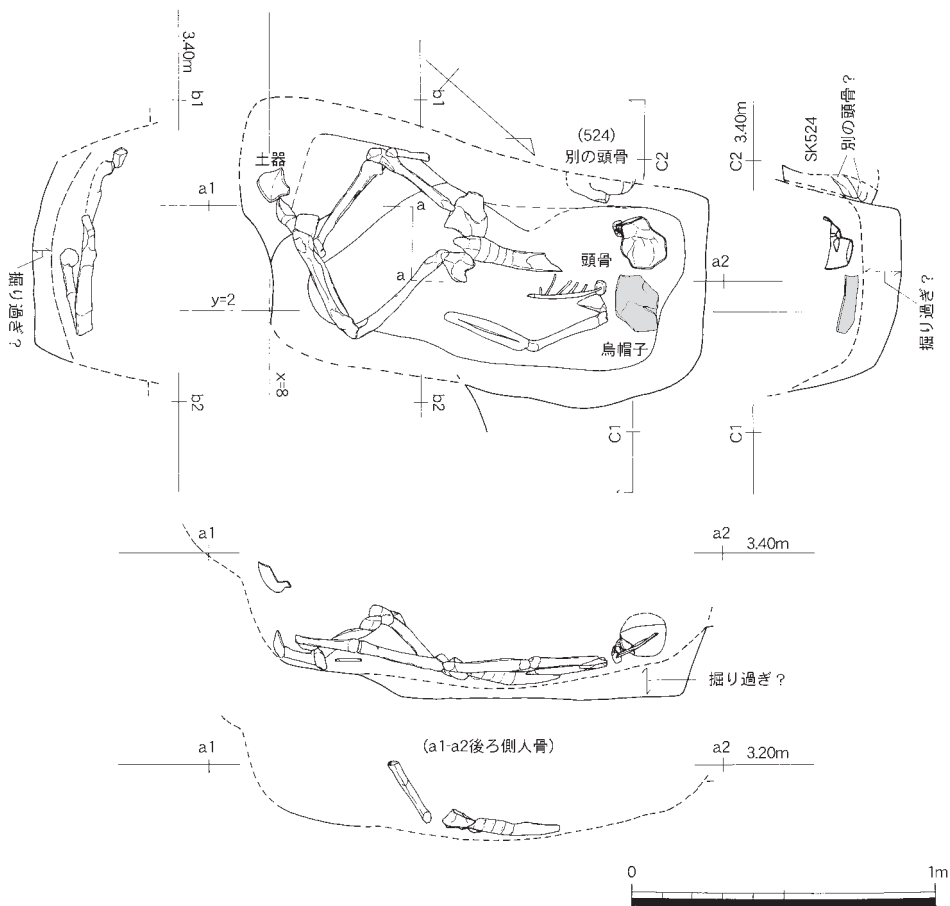


Fig. 17 SK521 (・524) 土墳墓実測図 (1/25)

西辺と東辺にも有機質の何か(板?)の痕跡の極暗褐～黒褐色土層が走る(土層c1-c2の2層、b1-b2の13層)。側板痕跡の可能性あり。幅60cm前後は、側板で仕切られた範囲となる。調査途中、重複するピットを境に北半030Bを042遺構、南半030Aを079遺構ともしたが、同一のものだと判断した。北半にある鉄製小刀(Fig. 28-1)を副葬品とすれば、人骨の遺存は無かったが、木棺墓であった可能性がある。頭位はどちらか不明だが、主軸方位はN-53°-W。南半のみの

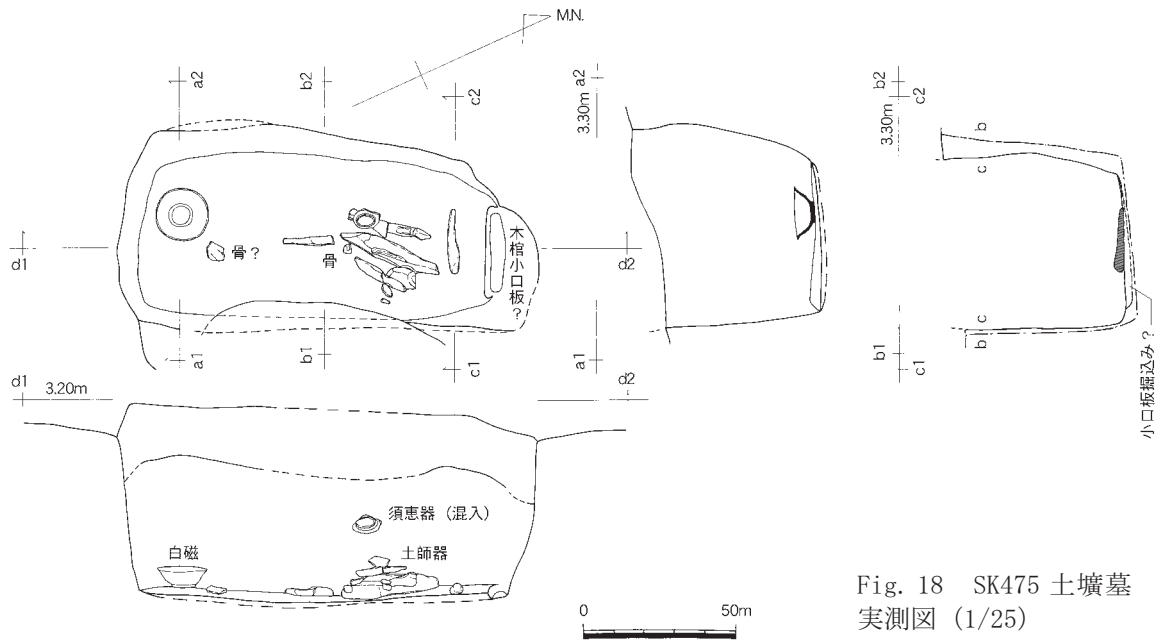
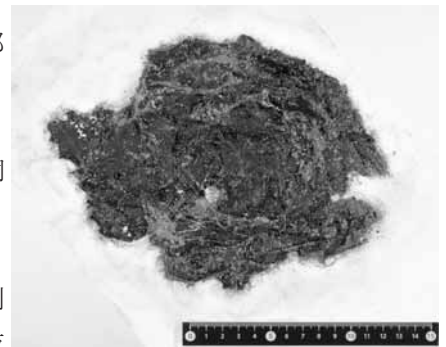


Fig. 18 SK475 土壙墓  
実測図 (1/25)

確認だが、下部の薄い粗砂層を剥がすと、極暗褐～黒褐色層が一部に認められた（土層 e1-e2 の 2～8 層）。意図的に敷いた層か、あるいは底板が腐食した層の可能性がある。出土遺物（Fig. 22-1, 26-1～5, 27-1 など）から、13 世紀前半頃の遺構か。その他、銅銭 1 枚を出土（表 1）。

・ SP154 (Fig. 14 左下)

SK030 を切ると見られるピット。径約 30cm、深さ 30cm。上段南側に根固めの石。下段は径が小さくなる土師器小皿が落ち込み、柱抜きか。出土遺物



Ph. 4 SK521 出土「烏帽子」写真

(Fig. 24-13 など)

から 13 世紀か。

・ SK053 (Fig. 14 右上、Ph. 3-4)

第 1 面 B1 グリッドで検出。南北約 80cm×東西 75cm の不整円形土坑。掘方は北側が浅く深さ 10～12cm、南半が深さ 25cm。南半最下層に骨があるが、獣骨か人骨か不明。おそらく 13～14 世紀の遺構。

・ SP117 (Fig. 14 右二段目)

第 1 面 C1 グリッド

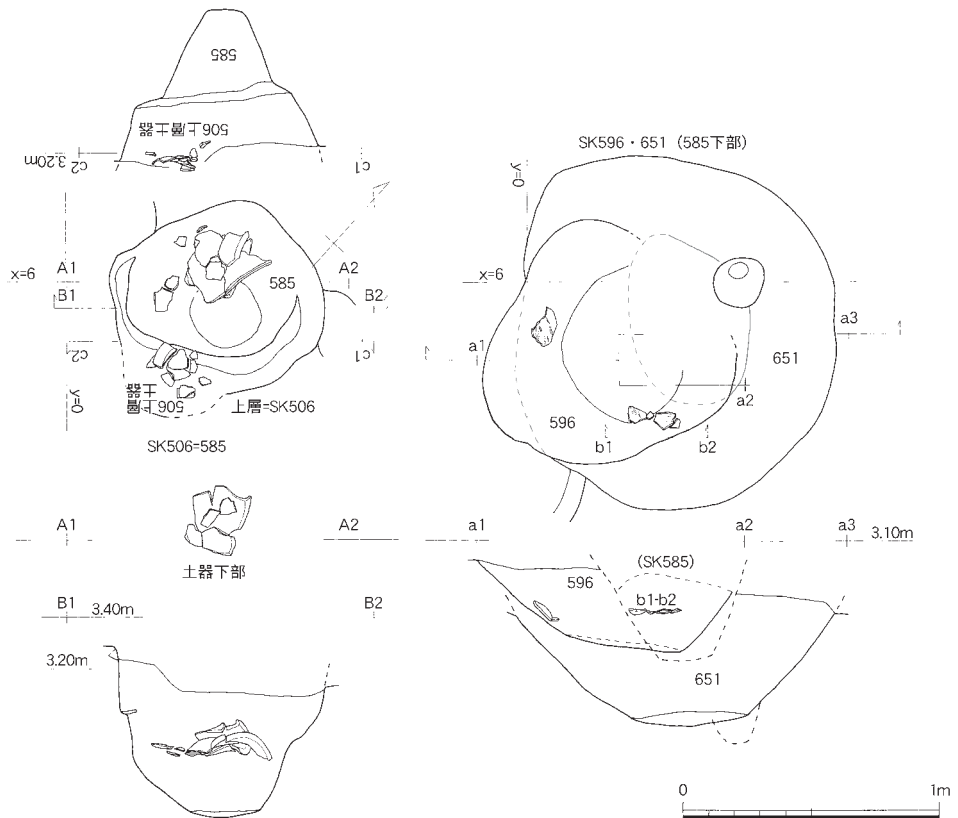


Fig. 19 SK506=585・596・651 実測図 (1/30)



ドで検出。約60cm×46cmの楕円形ピット。根固めの石を添える柱穴か。土師器が土師器小皿と白磁皿が北側に落ち込んでいたが、柱抜き時の祭祀か。出土遺物 (Fig. 24-8~11 など) から、13世紀中頃~後半か。

・SP028 (Fig. 14 右三段目、Ph. 3-5)

第1面A2グリッドで検出。径約60cm、深さ30cmの柱穴。中央に比較的平坦な石数枚とその下に土師器小皿などが落ち込む。石を礎石的なものとする場合、掘方底面から浮いており、かつ傾いていることから、そうではなく、柱抜き後に土器をまず投棄し、その上に石を投棄したものと判断する。出土遺物から、おそらく13~14世紀の遺構。

・SK382 (Fig. 14 右下、Ph. 4-2、PL. 7-4)

第2面下部① (Fig. 8) C1グリッドで検出。ただし、第2面 (Fig. 7) 検出のSK383を切っているので、本来第2面で検出の遺構。上部にSK098があり、全形が分かったのが第2面下部である。略南北約120cm×東西76cm。深さ80cm。掘方は上半が筒状、中位でオーバーハングする箇所がある。それを境に下に鉢状にすばまる。出土遺物には奈良時代が多いが、青磁などから12世紀後半~13世紀前半の遺構。

・SX009 (Fig. 15 左上、PL. 5-7)

第1面A1グリッドで検出。SE010を切る。径290cm、深さ60cmまでの確認だが、調査区端にあるため、土留め矢板の構造・強度を考え全掘していない。本来は径300cm以上だろう。調査区南東部

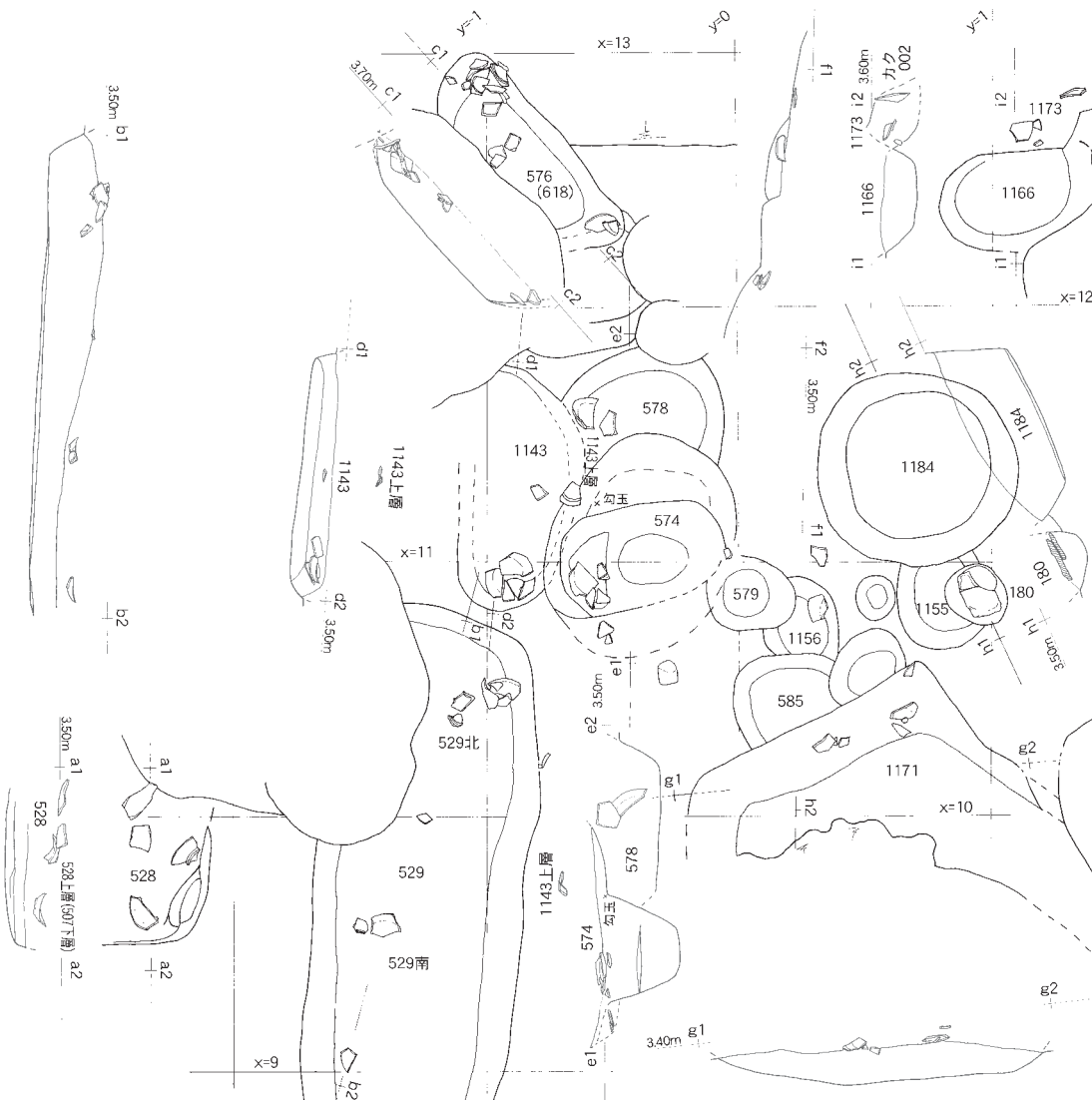


Fig. 20 調査区中央~北部第2面下部古代土器群出土状況 (1/30)

には井戸とみられる大型の掘方が多く、ほぼ全掘できたのはSE404だけであるが、このSX009も掘方の径を考慮すると井戸の可能性が高い。なお南東部に礫が集中して投棄されている。出土遺物 (Fig. 27-6 など) に明代末期 (17世紀前半) の青花碗もあるが、18世紀中頃の遺物を含むSE010を切り、わずかに肥前系染付もあり、近世中期以降であろう。ただし井戸とした場合、瓦組井戸ではないようであり、19世紀まで下らないものか。

・SE010 (Fig. 15 左上, PL. 5-6, 7)

SX009に切られる大型土坑だが、径が大きいことと、中央が落ち込んでいくので井戸の可能性が高いと判断する。径約265cm、深さ140cmまでの確認である。SX009と同様の理由で全掘できていない。出土遺物 (Fig. 27-5 など) から、中世遺物を含むが、肥前系染付碗の「洪武年口」銘は後世の仮借であり、他にも肥前系染付片や近世瓦質土器があり、近世中期の18世紀中頃～後半の遺構であろう。

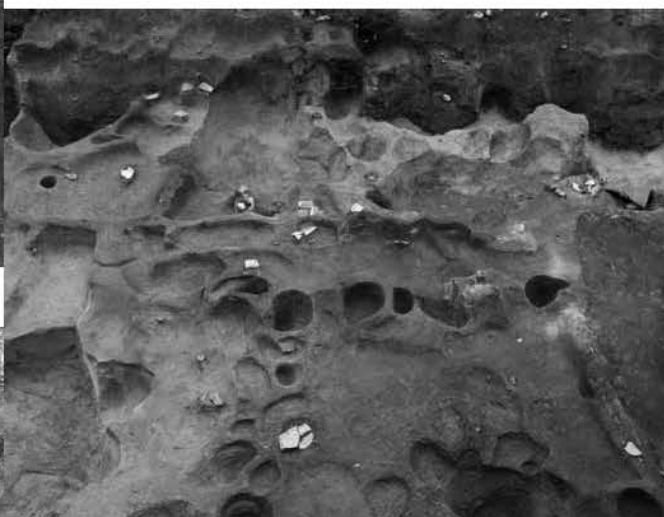
・SX328 (Fig. 15 右上, PL. 5-7, 8)

第1面A1グリッドで検出。上部ではSE010に切られるが、第2面では逆のように見えた。しかしSE010は近世であり、逆に見えたのはSE010壁面を掘り過ぎた結果と考える。またSK017との新旧は微妙で、上部にSP045があるため、SK017を切るのかその下からのものか明瞭ではない。なおSE404

を切るのは確実。最初は井戸遺構の井戸側の落ち込みと考えたがその掘り方は見られず、不審な点もあるが、円筒状の土坑と見ておく。第1面下部



1. 2面C1-2・D1 古代土器出土遺構群 (北から)



2. 2面C2西・C1 古代土器出土遺構群 (東から)



3. SK382・383・213 (東から)



5. SX574南 (左奥)・SX1143 (左中奥)・SK529 (中央)・SK528 (手前) (西から)



4. SX576 土器出土状況 (北東から)

Ph. 5 第2面遺構および古代遺構 (土器群) 写真補遺 (他はPL. 1～を参照)

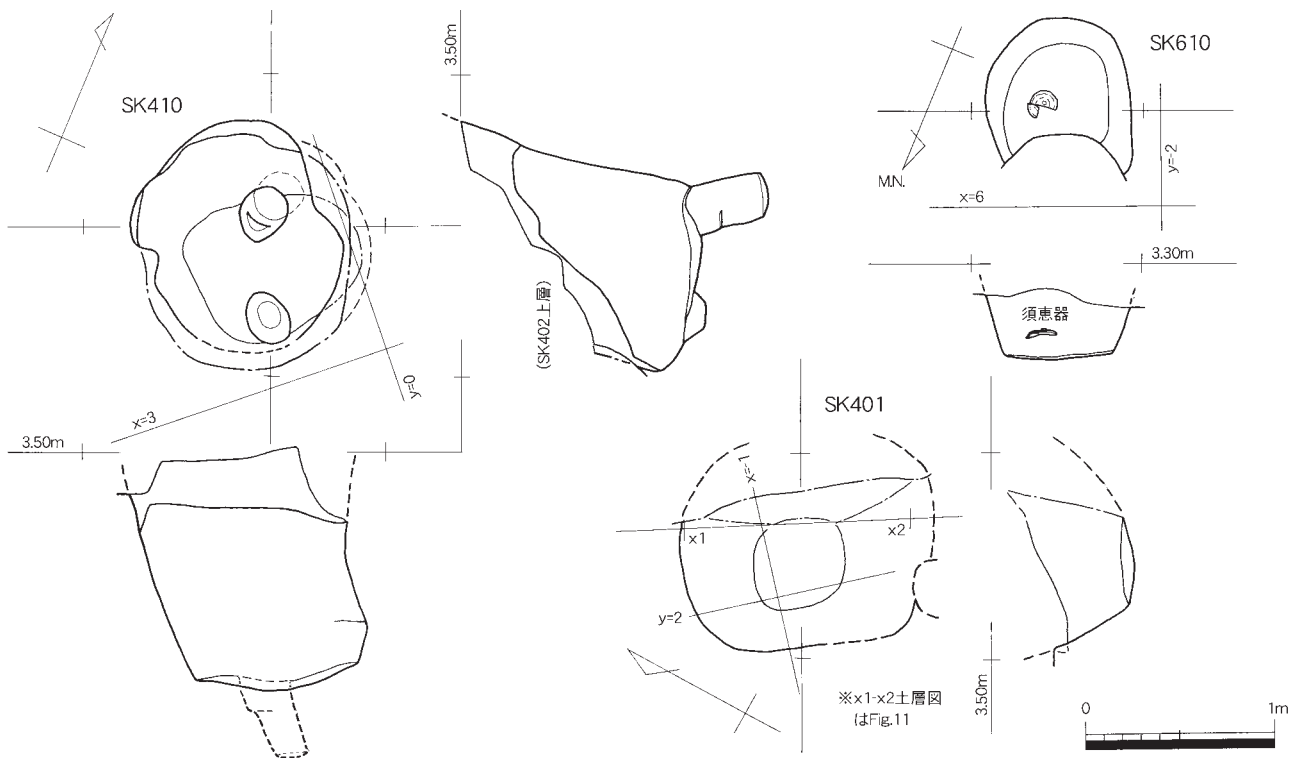


Fig. 21 SK410・610・401 実測図 (1/40)

で約 110cm×90cm の楕円形、その面から深さ 135cm まで掘削して以下は断念した。上層に北側からの礫の集中投棄が見られた。掘り方壁面は一部オーバーハングする。出土遺物には中世の土師器鍋や古相の備前焼播鉢片、龍泉窯系青磁碗があり、13～14 世紀頃と思われる。また銅銭 2 枚を出土 (表 1)。



1. SK585 下層土器出土状況 (南から)

2. SK596 (北から)

3. SK610 (北から)



4. 3面C1東・C2グリッド遺構掘削状況 (西から)

5. 3面B1グリッド遺構掘削状況 (西から)

Ph. 6 第2面下部古代遺構および第3面写真補遺 (他はPL. 1～を参照)



・SE404 (Fig. 15 左中段、PL. 7-9)

第2面A1・2グリッドで検出。第1面SK017・036の下部で検出した。ただしSK036はSE404の上部掘り方の誤認の可能性がある。SK402に切られ、SK405を切る。第2面で径約280cmの不正円形で、深さ約200cm。底面中央やや南側に径80cm、深さ15cmの凹みがあり、この中に掘削時にわずかに「桶組み」の木質が土壌化した痕跡があった。これは径約65cmである。したがって、現在は湧水がなかったが、井戸と判断する。出土遺物は、下層は12世紀後半～13世紀前半の輸入陶磁器や東播系須恵器があるが、中層以上には口禿の白磁があり、13世紀後半以降の廃棄・埋没と見られる。また銅銭4枚が出土した(表1)。

・SX405 (Fig. 15 左中段、PL. 7-10)

西側をSE404に切られる。南北約170cm×東西160cm以上だが、おそらく東西250cm前後の楕円形土坑となろう。深さは東側の確認面から160cm。深さ的には井戸の可能性もあるが、楕円形プランであれば後述のSK402に近い。出土遺物の土師器杯・皿や白磁、輸入陶器杯(Fig. 22-24)から12世紀後半～13世紀初頭頃と思われる。なお上層に高麗の象嵌青磁片があるが、上部遺構からの混入か。なお銅銭2枚が出土した(表1)。

・SK402 (Fig. 15 右中段、掘削途中 PL. 7-2 左上、完掘 PL. 8-13 左中央)

第2面A1グリッドで検出。南北約340cm×東西200cmの楕円形大型土坑。深さは130cm。北側は段掘り状でSK410(Fig. 21 左上)を切る。SE404を切ると思われた。出土遺物には12世紀後半～13世紀前半の土師器杯・皿、龍泉窯系青磁・白磁が下層に多くあったが、SE404との関係から伴うものではなく、上層に認められた瓦質土器こね鉢・挿鉢や口禿の白磁が伴うものであろう。土師器杯の一部(Fig. 27-3)などはやや新しいかもしれない。13世紀後半か。その他、円環状鉄製品(Fig. 29-1)や銅製鋌状留金具(Fig. 30-3)、銅銭1枚が出土した(表1)。

・SK299 (Fig. 15 左下)

第1面下部B1南グリッドで検出。南北約80cm×東西85cmの略円形土坑。深さ60cm。壁面は中位で一部オーバーハングする。東側は下位に段(テラス)がある。出土遺物(Fig. 22-18など)から、12世紀後半～13世紀前半か。

・SK501 (Fig. 15 右下、PL. 7-6, 7)

第2面B1北・C1南グリッドで検出。径115cmの円形土坑。深さ85cm。ただし、第1面下部(Fig. 6)で検出された上位のSK355・1062・1063は、SK501上位覆土の誤認の可能性があるので、その場合深さは約100～110cmとなる。掘削していくと、中位以下に南寄りに径70～75cmの円形椀状の落ち込み痕跡(黒褐色土)認められた。ただし井戸ではない。何か桶状のものを埋めたか。出土遺物に瓦質土器こね鉢や土師器杯があり、13世紀前半頃と思われる。上層のSK1062・1063で銅銭1枚を出土(表1)。

・SK131 (Fig. 16 上段、PL. 6-2)

第1面下部C1北・D1南グリッドで検出。南北88cm×東西132cmの不整楕円形土坑。第2面からの深さ85cmだが、検出できた第1面下部からは深さ約100cmとなる。第1面下部(Fig. 6)で、SK(SP?)285に切られて検出される。図面はSK285掘削除去後のものである(Fig. 16 上段左)。さらにSP286とも重複する(Fig. 16 上段右)。SK285、SK131、SP286は、相互に遺物が接合するので、あるいは同一遺構の可能性もあるが、平面プラン上は分離できた。出土遺物(Fig. 22-8～13)から、12世紀後半～13世紀初頭頃だろう。また銅銭1枚が出土した(表1)。

・SK038 (Fig. 16 下段)

第1面A2北・B2南グリッドで検出。南北約160cm×東西110cmの不整楕円形土坑。深さ65cm。北側は3段の掘り方となる。銅銭1枚(図中B、表1)、脚台付(?)不明銅製品(図中C、Fig. 30-2)が出土した。その他の遺物(土師器杯など)から13～14世紀であろう。

・SK521 (Fig. 17、PL. 8-1～6、裏表紙左上)

第2面C1グリッドで検出。上部に多くの遺構があり、第2面では南側のみの検出で(Fig. 7)、第2面下部①(Fig. 8)で全体を検出した。南北約160cm×東西77cmの長方形土坑。下端で南北約130cm×東西55cm前後となる。方位N<sup>o</sup>40-W。下部で人骨一体分を検出したので土壌墓である。ただし全体に遺存状況が悪く脆くなっていたため、人骨は取り上げ後にボロボロになってしまった。

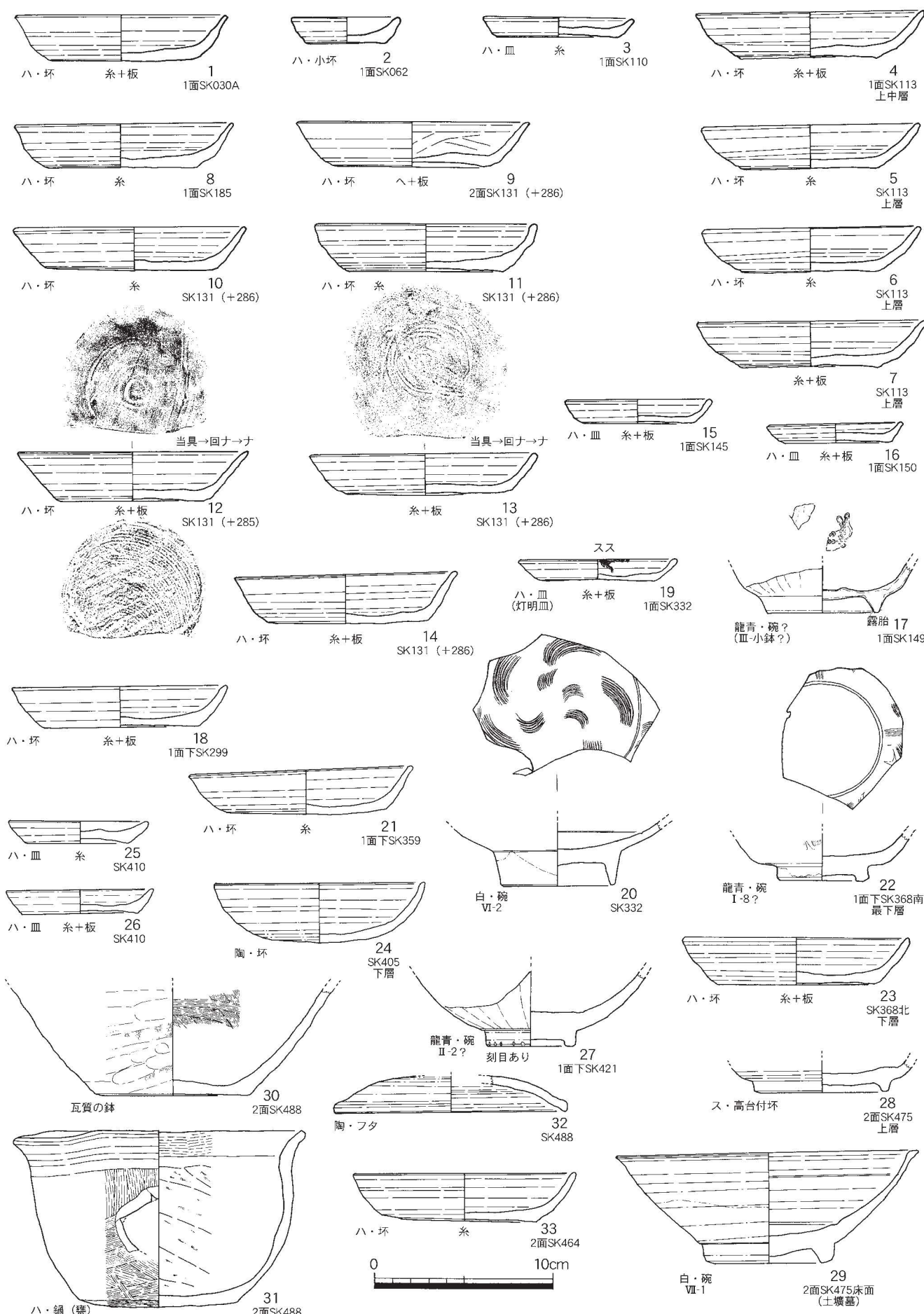


Fig. 22 各遺構出土土器・陶磁器実測図 (1) (1/3)

屈肢葬である。頭蓋骨は北側だが、特筆すべきはこの東脇に漆皮膜製品があり、「烏帽子」であった高いことである (Ph. 4)。出土位置から、実際に頭部に身に付けたまま埋葬された可能性が高いが、全国的にも数例しかない。なお底面は不注意から 10~20cm 近く掘り過ぎてしまったが。実際の深さは第 2 面から 45cm ないし  $\alpha$  である。出土遺物には足側上層に須恵器短頸壺 (Fig. 23-4) があるが、これはおそらく奈良時代のものであり混入で、覆土中には他に回転糸切底の土師器坏片などがあり、12 世紀後半~13 世紀初頭であろう。なお、SK521 完掘後に調査区西壁を精査したところ、別の頭蓋骨とみられる骨の塊に当たってしまった (PL. 8-7)。西側に接してもう一つの土壙墓があると判断した。これを SK524 としたが、調査区壁中のため安全上からそれ以上の掘削を断念した。

・SK475 (Fig. 18、PL. 7-11、12、裏表紙右上)

第 2 面 C2 グリッド、カクラン 002 北部下位で検出。略南北約 138cm×東西 70cm の長方形土坑。深さ 62cm 前後。方位 N (磁北) -°40-E。底面に人骨を検出した。土壙墓である。人骨は遺存状況が SK524 よりもさらに悪く、すでに一部部位しかなく、かつ脆くボロボロであった。そのため、正確な骨の部位が不明だが、北東側の骨の遺存は骨盤から脚肢骨だろう。屈肢葬と見られる。これより南西の脊椎骨から上位の遺存は非常に悪い。南西側底面に白磁碗の副葬があるが、この傍に頭骨の残骸があった。底面は約 120cm×55cm の長方形で、遺構の壁も直立的、断面箱形である。北東側底面には明らかに小口板痕跡があり、箱形の木棺墓であった可能性がある。出土した副葬白磁碗 (Fig. 22-28) から、12 世紀であろう。須恵器坏 (Fig. 22-29) は混入と見られる。

・SK506=585 (Fig. 19 左、PL. 8-9、Ph. 6-1、裏表紙左下)

第 2 面下部① B2 グリッドで検出したが (Fig. 8)、遺構の重複が激しくプランが明瞭になったのは第 2 面下部②である (Fig. 9)。南北約 60~78cm×東西 72cm 前後の不整形形状平面で、断面は中位まで土坑状で、下位に楕円形のピットがある 2 段の掘り方である。深さ 66cm。南側上層 (上層を SK506 とした) で須恵器坏 (Fig. 23-2) を、中位に土師器甕 (Fig. 23-1、Ph. 7) を出土した (中層以下を SK585 とした)。土師器甕は破碎され、その破片で下位ピットに蓋をするような出土状態である。出土遺物から、8 世紀中頃~後半と見られる。SK585 は、SK596 (後述) や SK488 (PL. 6-13) のような同じ奈良時代土坑を切っている。なお SK488 からは下層で土師器甕が出土している (Fig. 22-31)。約 130cm×60cm の楕円形ないし隅丸長方形土坑で、切り合いからも奈良時代の遺構と考える。瓦質土器の鉢や陶器蓋もあるが (Fig. 22-30、32)、上位の混入ないし上層遺構の見落としと考える。

・SK596 (Fig. 19 右、Ph. 6-2)

上述の SK585 に切られて検出された。南北約 100cm×東西 70~95cm の不整形形状の土坑。深さ 40cm。土師器甕片などが出土し、奈良時代の遺構。

・SK651 (Fig. 19 右)

SK585 および SK596 に切られる状況で第 2 面下部②で検出した (Fig. 9)。しかし全形が判明したのは第 3 面である (Fig. 10)。第 2 面下部では SK685 ともしている。南北約 130cm×東西約 140cm の不整形土坑。深さは第 3 面から 54cm だが、SK 596 検出面から存在するので約 70cm となる。飛鳥時代末~奈良時代の遺構だろう。

・調査区中央~北部第 2 面下部の古代 (飛鳥時代末~奈良時代) 土器群出土遺構 (Fig. 20、Ph. 4-1. 2)

第 2 面ないしその下部で、飛鳥時代末~奈良時代の土器群が調査区中央からやや北側にかけて散在して出土した。その出土状況を記録しつつ、その土器群に伴う可能性がある遺構群を重ねて図示したのが Fig. 20 である (各遺構の断面図はやや薄い線で示した)。中には遺構がはっきりせず、砂層中から土器 (群) のみが出土する場合もあった。これら古代前期



Ph. 7 SK585 出土土師器甕 (Fig. 23-1)



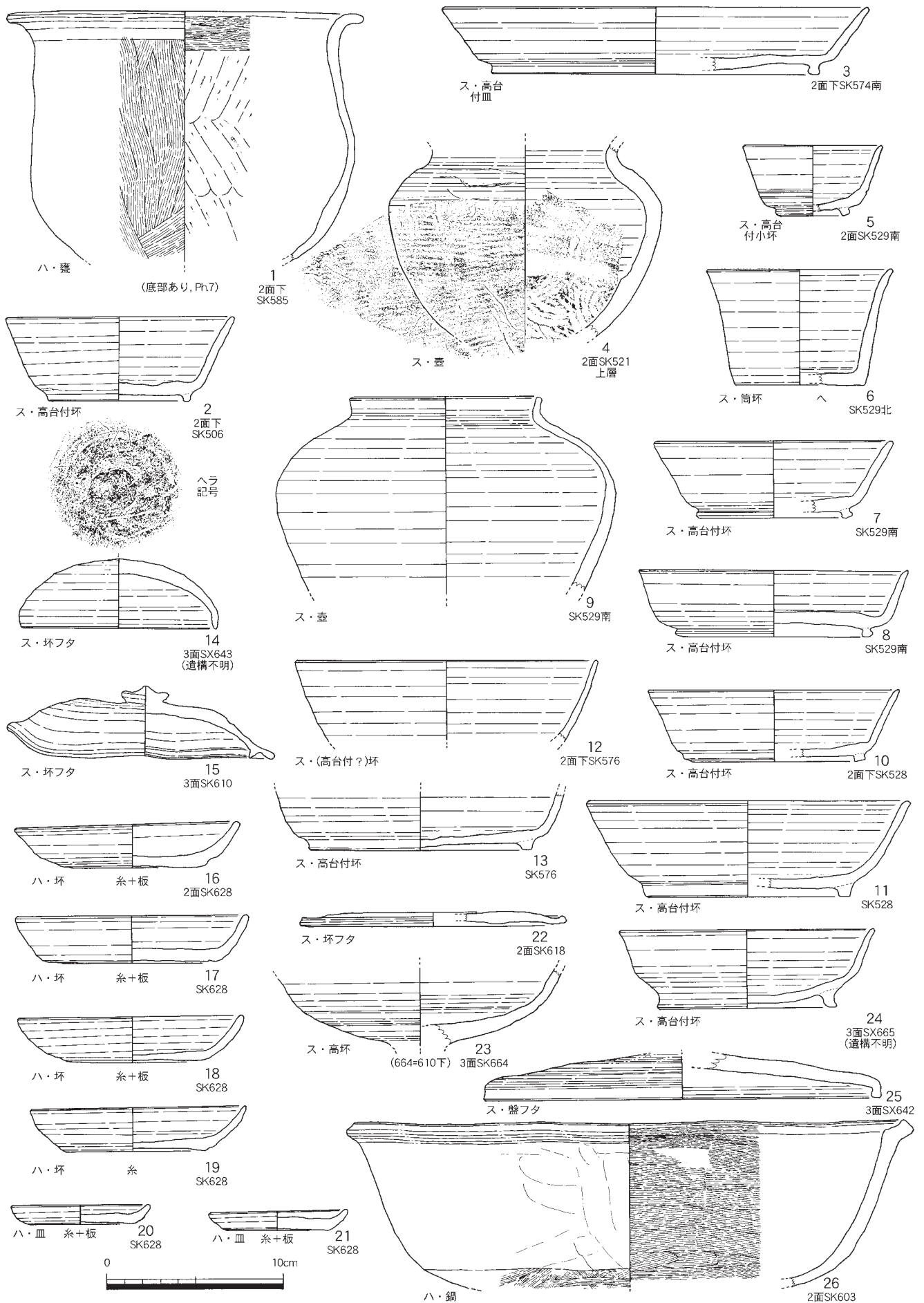


Fig. 23 各遺構出土土器・陶磁器実測図 (2) (1/3)

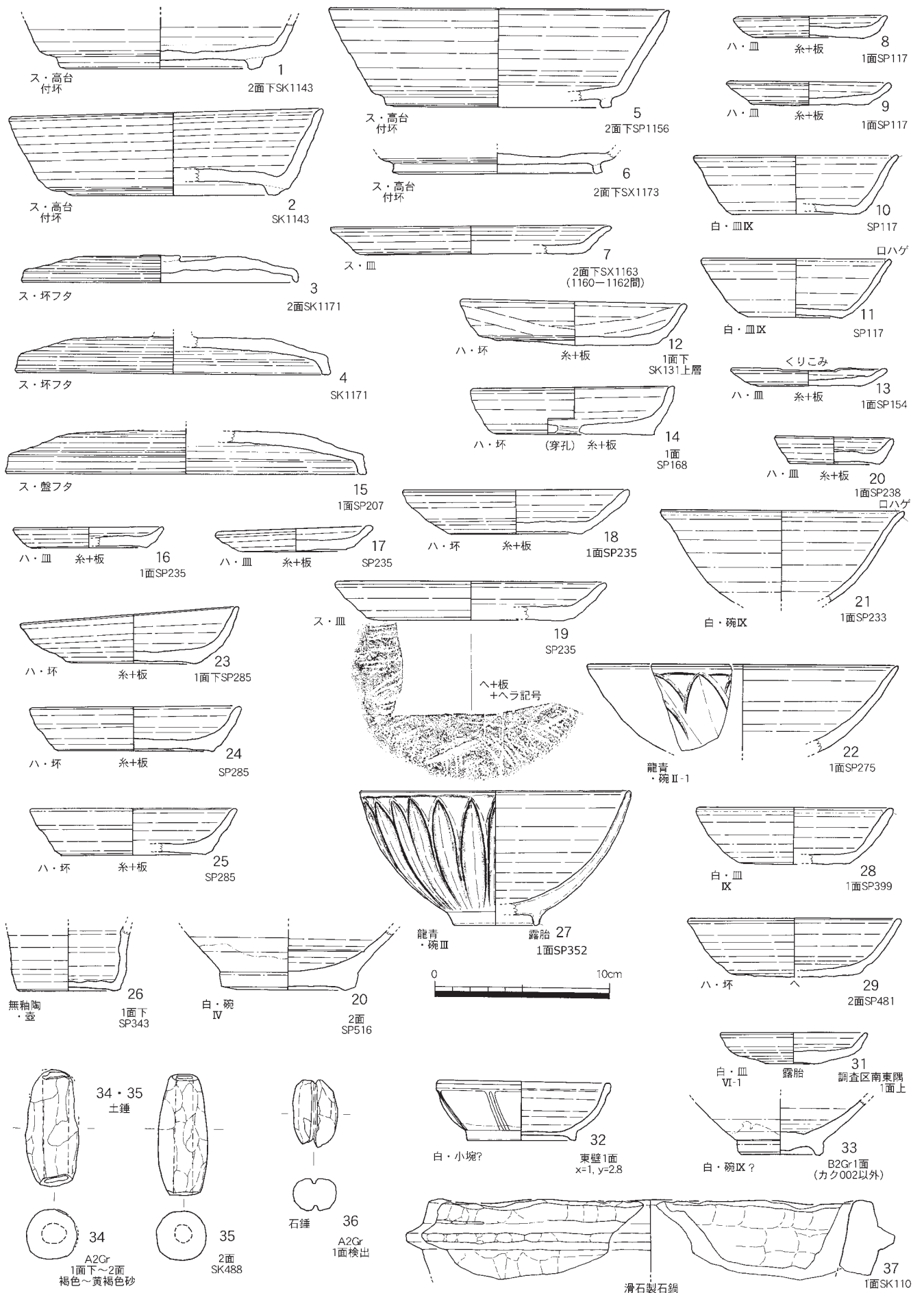


Fig. 24 各遺構出土土器・陶磁器 (3)、土鍾・石鍾、石鍋実測図 (1/3)

の遺構覆土が明瞭でないのは、当時の当地区周囲での地表面の有機土壌が未発達であったためであろう。以下、この面で記録した遺構について報告する。

SK576 (618) (Ph. 4-4) は第2面ですでに上位を検出し (Fig. 7)、土器群が露出していた。南北約30cm以上×東西100cmの不整長方形土坑。深さ20cm。出土遺物 (Fig. 23-12, 13) から、8世紀中頃～後半だろう。SK529 (Ph. 5-5、PL. 8-7, 8) は第2面で検出した (Fig. 7)。南側を後世遺構に切られるが、略南北220cm以上×幅80～85cmの溝状土坑である。深さは20～26cmで、底面は南側が低くなる。出土遺物 (Fig. 23-5～8、Fig. 26-22～24) から、須恵器VIIA期新相 (註) の8世紀第2四半期の遺構だろう。(註) 舟山良一 2008「V. 出土遺物の検討 1. 須恵器の編年」『牛頸窯跡群—総括報告書I—』大野城市文化財調査報告書第77集、大野城市教育委員会。本報告書での飛鳥時代から平安時代初期の須恵器の編年と実年代観はこれによる。ただし飛鳥時代の実年代観は、私見によりやや新しく修正している (久住猛雄 2009『那珂53』福岡市埋蔵文化財調査報告書第1034集、pp. 16-17)。すなわちIV期末～V期が7世紀第3四半期、VI期を第4四半期～700年直後までとする。

SK528 (Ph. 5-5) は第2面下部①C1グリッドで検出 (Fig. 8)。西側は調査区外、北側は後世遺構に切れ、南北70cm×東西35cmが確認された隅丸方形土坑の一部。土器群は遺構プラン検出前の上層で出土。土器群検出レベルから土坑底面までは26cm。出土遺物 (Fig. 23-10, 11) は須恵器VII B期で、8世紀中頃～後半。SK574 (Ph. 5-5、PL. 8-10) は第2面で検出した。南北90cm×東西75cmの楕円形土坑で、中央が上位とは直交する方向の楕円形ピットとなり落ち込む。深さ40cm。西側上層で滑石製勾玉 (Fig. 27-10) が出土した。出土遺物 (Fig. 23-3ほか) から須恵器VII A期新相 (皿の高台が古い様相) ないしVII B期で、8世紀中頃前後だろう。SK1143 (Ph. 5-5、PL. 8-7, 8, 10) は第2面で一部検出したが、その下部で明確化した。後世遺構により西側のプランが不明瞭だが、南北約98cm×東西50cm前後の不整楕円形状土坑。検出できた深さは15cmだが、「1143上層」とした土器から遺構底面までは35cmである。SK578を切るのは確実だが、SK574に切られるとしたもののこの切り合いは不確実である。出土遺物 (Fig. 24-1, 2) から (1が上層、2が南側下層)、須恵器VII B期の8世紀中頃～後半か。遺物の時期からもSK574との関係は微妙。SK578は第2面で検出した。SK1143とSK578に切られる。径約65cmの略円形、深さ30cmの土坑。須恵器片が出土。奈良時代前期か。SK1184は第2面C2グリッドで検出。径約78cmの略円形土坑。深さ30cm。おそらく奈良時代のもの。SK1166は第2面D2南グリッドで検出。略南北約60cm×東西40cmの楕円形土坑。深さ

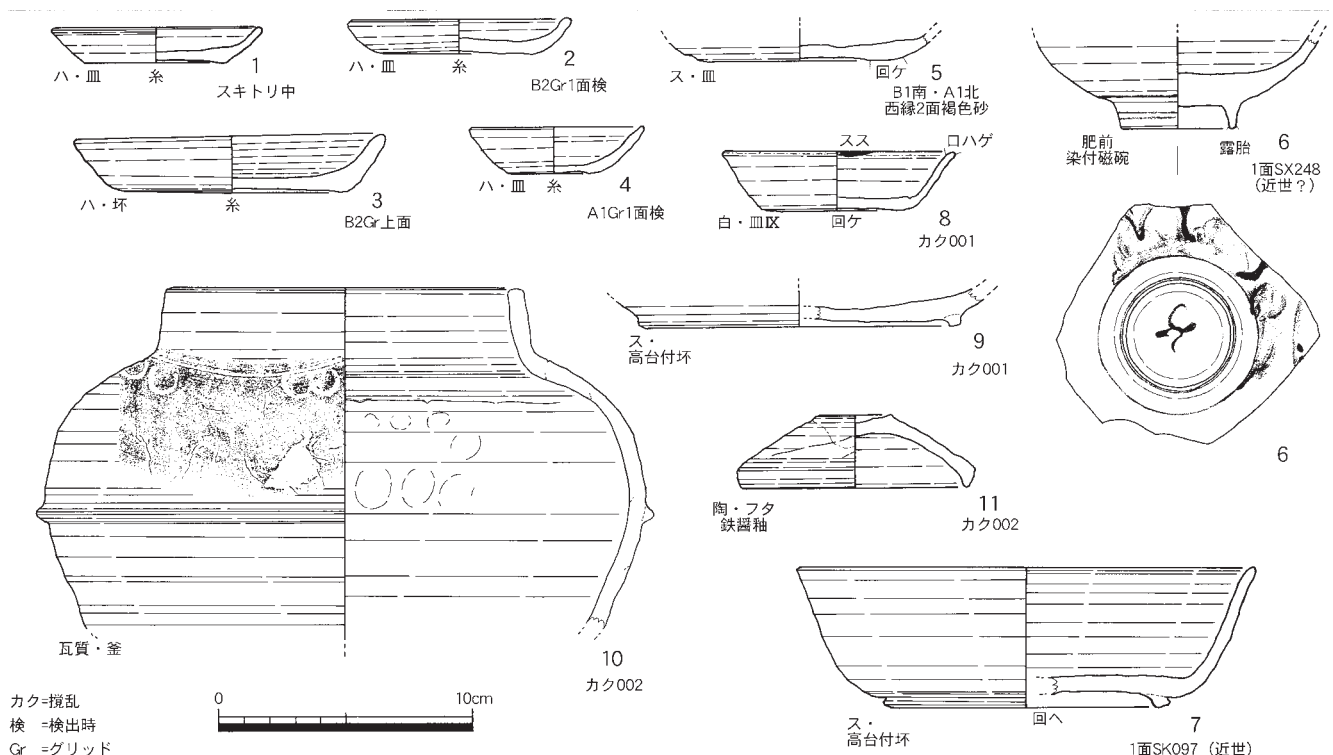


Fig. 25 遺構検出時・包含層、攪乱出土土器・陶磁器実測図 (1/3)



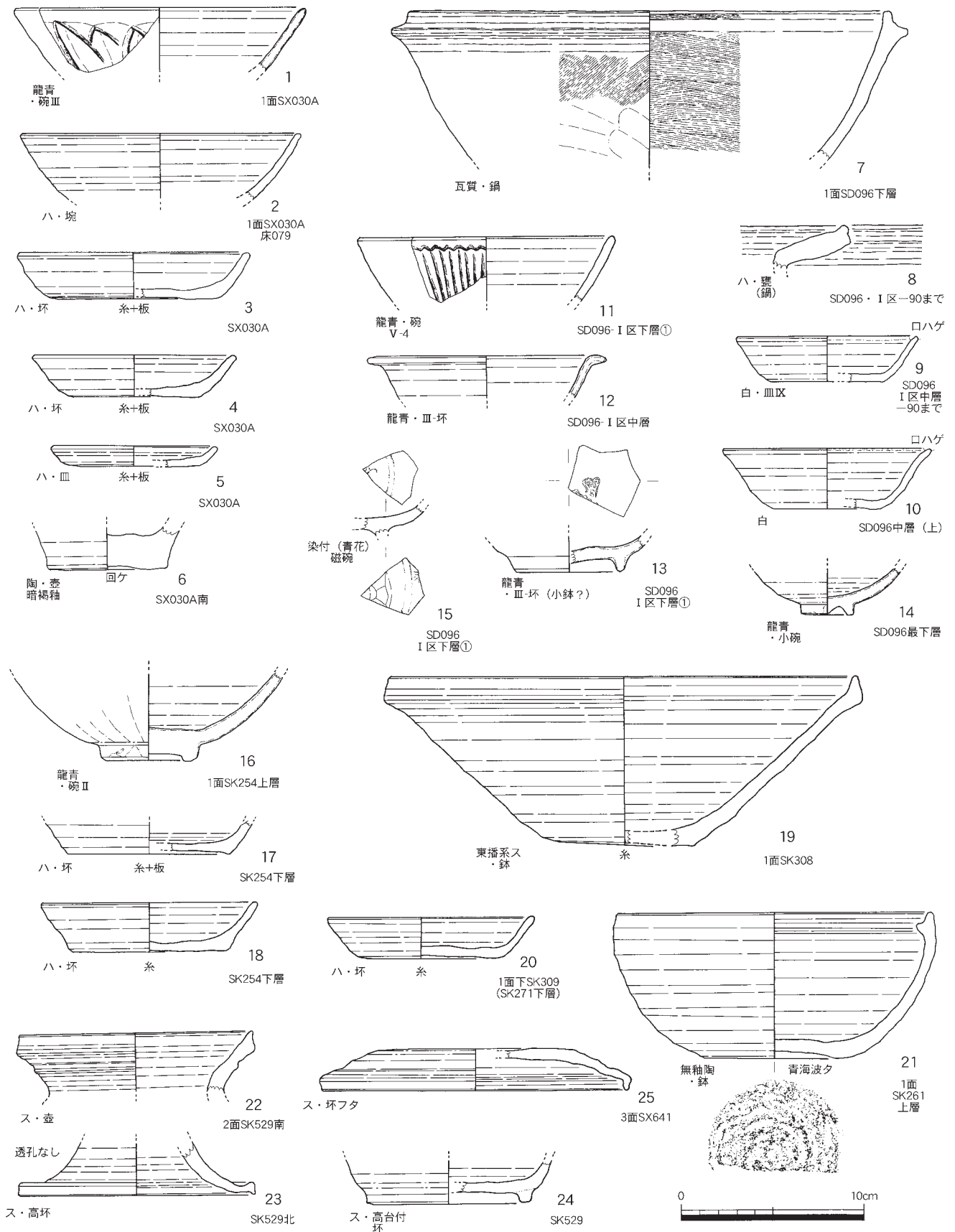


Fig. 26 各遺構出土土器・陶磁器実測図(4)(1/3)

15cm。出土遺物は僅少だが、10～11世紀の土師器坏片がある。SX1171は第2面C2グリッドで検出。南～東側を攪乱で壊される。南北約120cm×東西90cm以上、深さ20cmの推定方形土坑。出土遺物

(Fig. 24-3, 4) はいずれもやや上層出土だが、これらの遺物は須恵器ⅦA期新相とみられ、8世紀第2四半期か。遺構もその時期に近いだろう。SX1173はSK1166の北側、カクラン001の南壁砂層中に土器が複数まとまって出土したが、遺構プランは不明である。出土遺物 (Fig. 24-6、Fig. 27-4) は、須恵器ⅦB～Ⅷ期古相か (Fig. 27-4は瓶類か)。8世紀後半～末であろう。SP1156は第2面下部①のC2グリッドで検出。SP579とSK585 (前掲) に切られる。南北約35cm×東西30cmのピット。深さは10cmのみ。須恵器坏が出土し (Fig. 24-5)、ⅦA期新相～ⅦB期。8世紀第2四半期～中頃。

・SK410 (Fig. 21 左上、PL. 6-6・7-1)

第2面B1グリッドで検出し (Fig. 7)、南側を切るSK402掘削後の第2面下部① (Fig. 8) で全形が判明した。南北約120cm×東西116cmの略円形土坑。深さ130cm。覆土は炭化物含む黒褐色土が多くあった。底面は80cm×85cmの不整形円形となるが、東側の壁がオーバーハングし、底面も東に寄っている。底面に2つのピットがあり、北ピットは底面から深さ40cm、南ピットは10cmである。深い北ピットは斜めに掘り込まれる。出土遺物 (Fig. 22-25, 26 など) から、13世紀中頃～後半か。

・SK610 (Fig. 21 右上、Ph. 6-3)

第2面下部②のB1グリッドで検出した (Fig. 9)。東西約80cm×南北推定約90cmの不整形円形土坑。深さは27cm。出土遺物 (Fig. 23-15) の須恵器坏蓋は、須恵器Ⅵ期 (7世紀第4四半期) であり、また内面天井部に赤彩痕跡がある。土壙墓の可能性を示唆する。

・SK401 (Fig. 21 右下、土層図 Fig. 11 右上、PL. 7-8)

第2面A2グリッド東辺で検出した。東側が調査区外となる。略南北約136cm×東西80cm以上

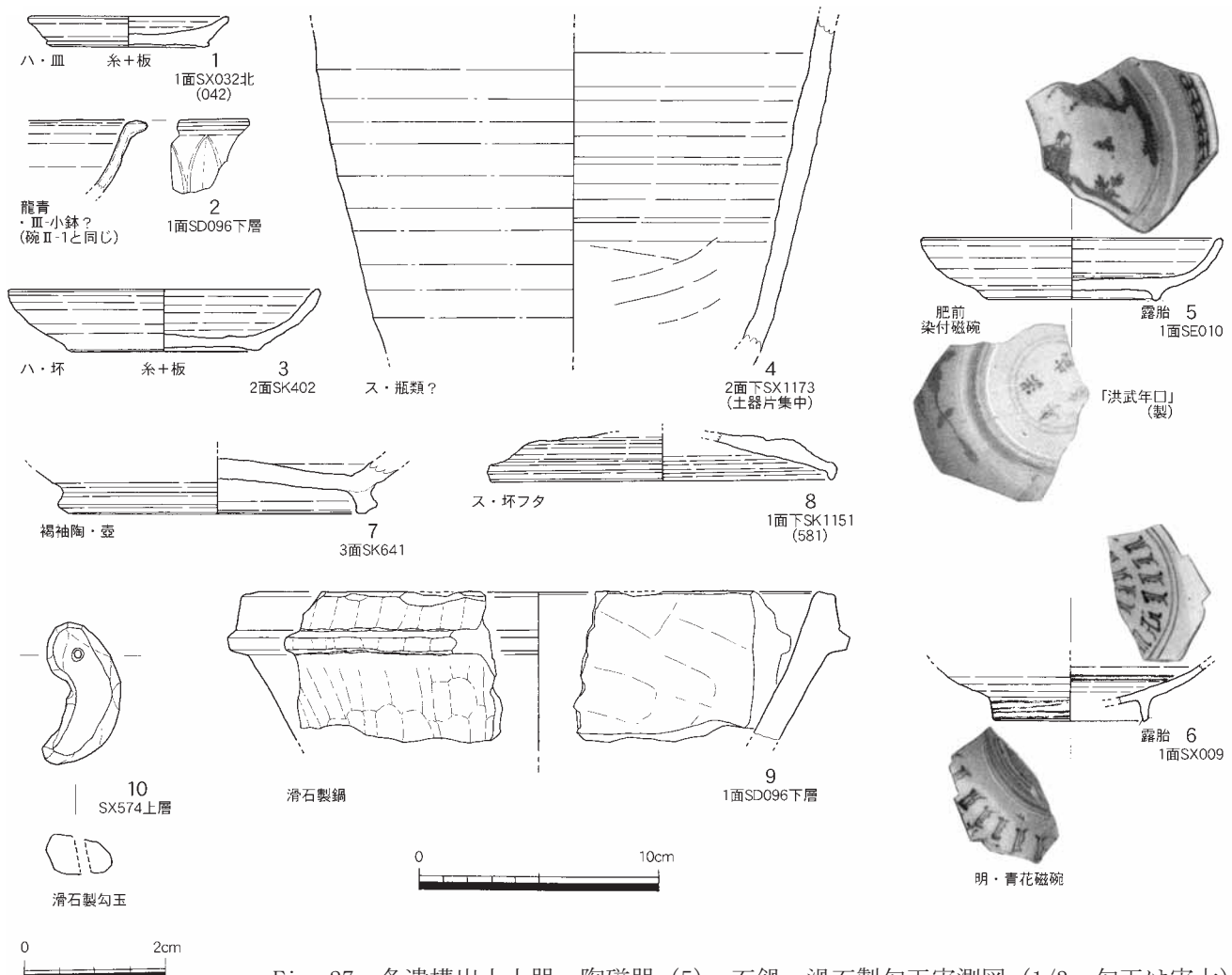
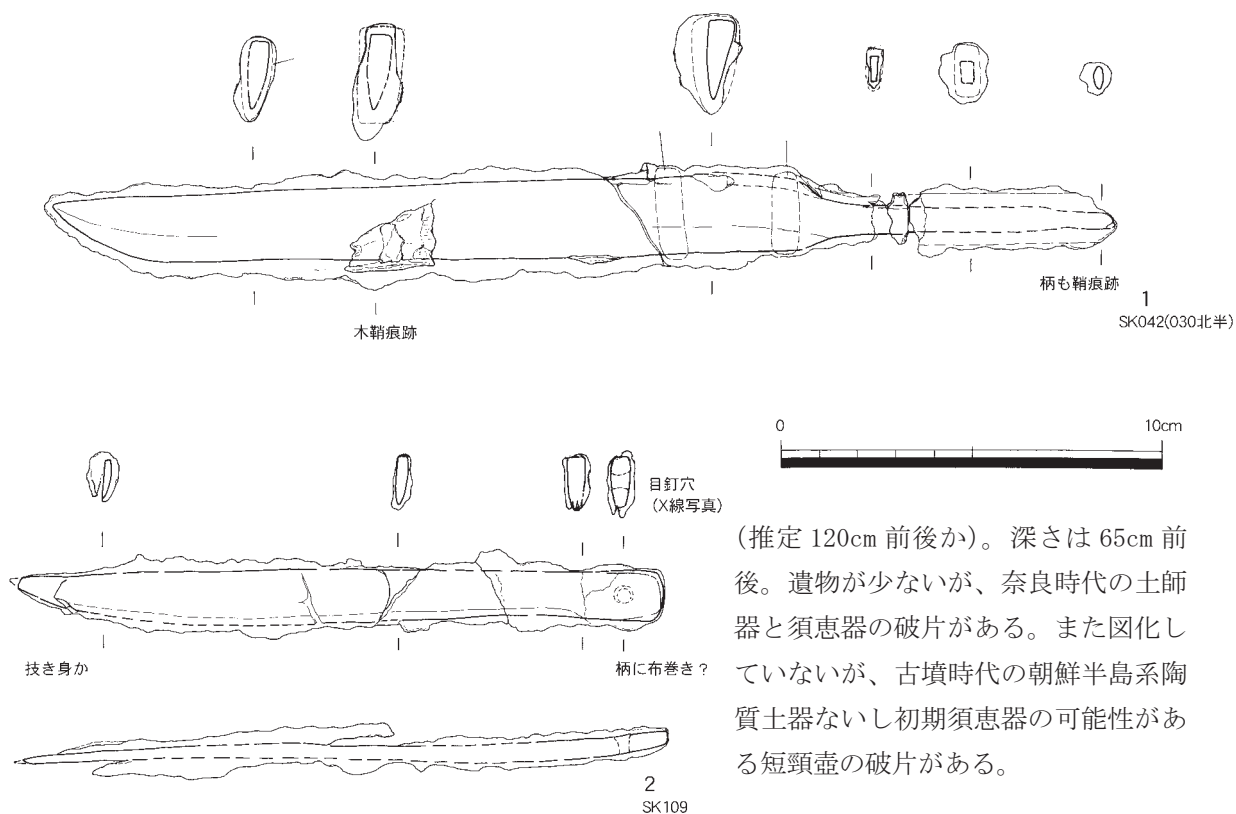


Fig. 27 各遺構出土土器・陶磁器 (5)、石鍋、滑石製勾玉実測図 (1/3、勾玉は実大)



(推定 120cm 前後か)。深さは 65cm 前後。遺物が少ないが、奈良時代の土師器と須恵器の破片がある。また図化していないが、古墳時代の朝鮮半島系陶質土器ないし初期須恵器の可能性のある短頸壺の破片がある。

Fig. 28 鉄製小刀・刀子実測図 (1/2)

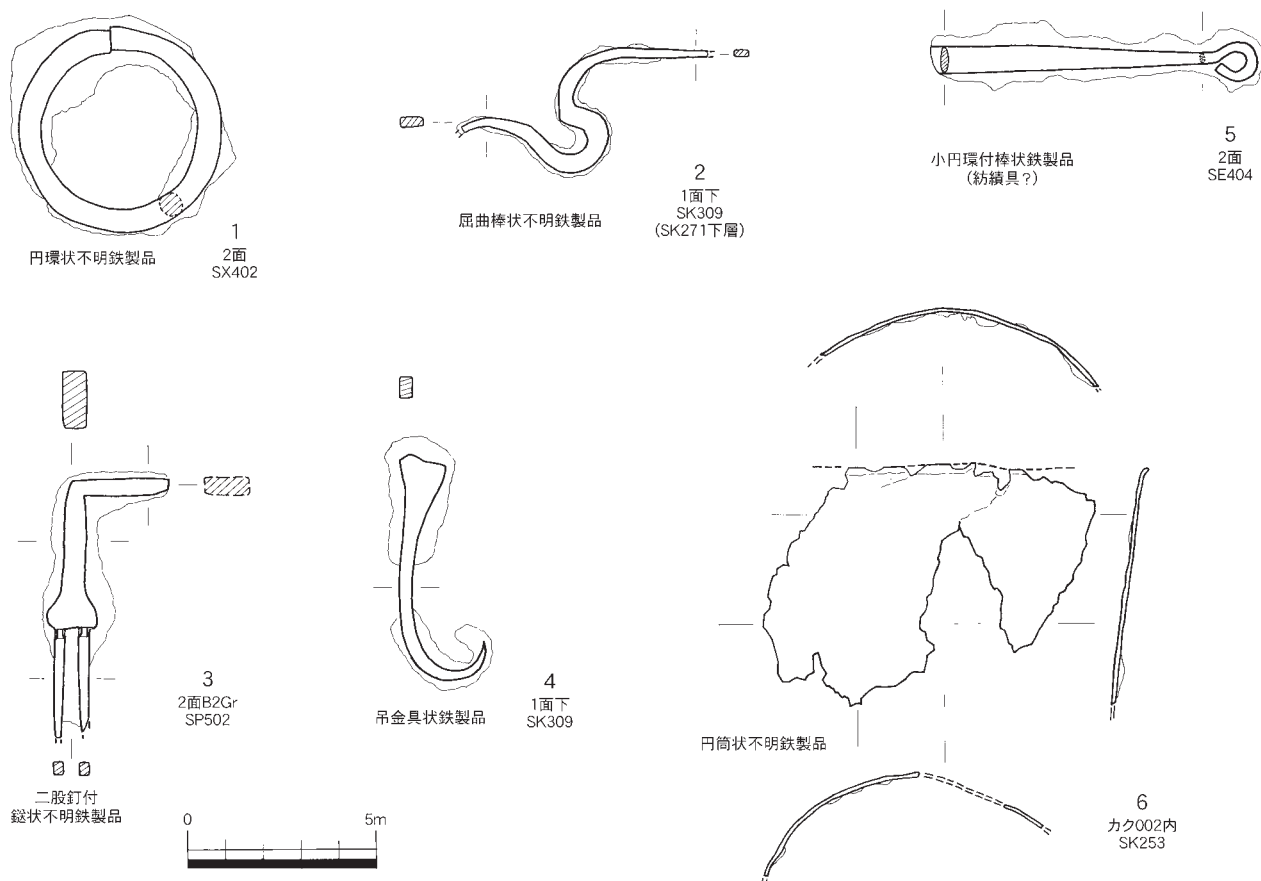
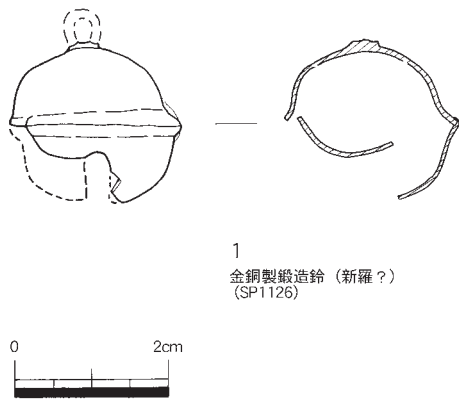
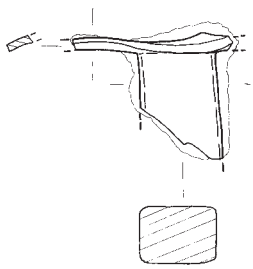


Fig. 29 鉄製品実測図 (1/2)

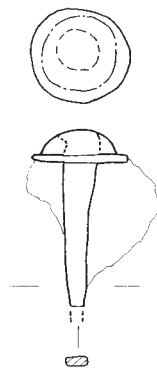




1  
金銅製織造鈴 (新羅?)  
(SP1126)



2  
脚台付不明銅製品  
(SK038)



3  
鋇状留金具  
(2面SX402南)

Fig. 30 銅製品実測図 (1/2)

その他、第3面 (Fig. 10) で、遺構プランが分からずに砂層から土器が出土したものがあつた。**SX665** は高台付坏身が出土し (Fig. 23-24)、VI期新相で7世紀末~700年前後。**SX643** は「坏H」の坏蓋が出土し (Fig. 23-14)、口径 11.2cm はIV期の最新相で7世紀中頃である。また第3面の**SK641** は、東西約 100cm×南北 62cm の楕円形土坑で、標高 3.3m で検出し、深さは 40cm であるが、VIIA期新相の坏蓋 (Fig. 26-25) を出土している。

### 3. 出土遺物

出土遺物については、検出遺構の説明に紙幅を費やしたため、詳述できない。土器・陶磁器類はFig. 22~27に図化掲載したが、図中に遺物の種類・形式や一部調整などを記した。その凡例を以下に記して説明に代えることにする。



1. Fig. 28-2 鉄刀子柄部 X線写真

2. Fig. 29-5 X線写真

3. Fig. 29-1 X線写真

4. Fig. 29-4 X線写真

5. Fig. 29-3 X線写真

6. Fig. 29-6 円筒状不明鉄製品

7. Fig. 30-1 銅鈴 (右: X線写真)

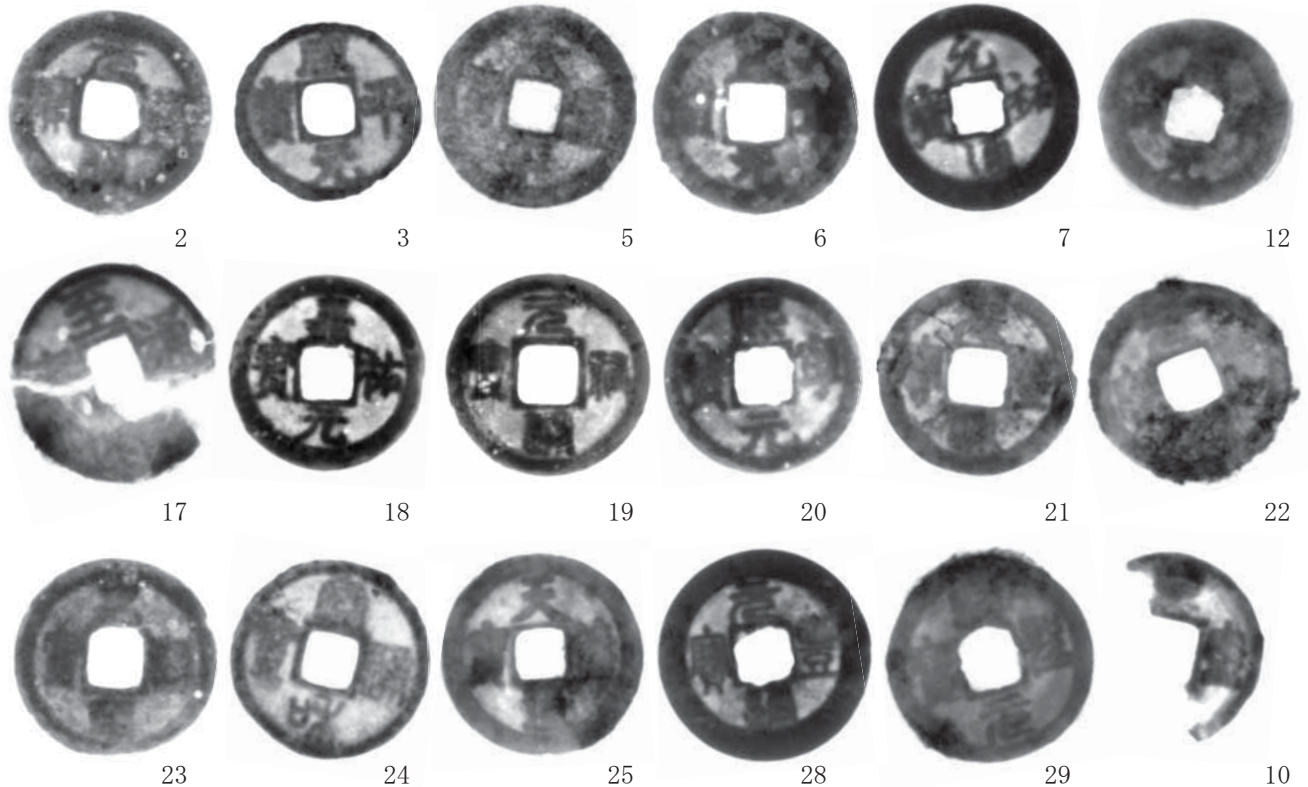
8. Fig. 30-2 不明銅製品 (右: X線写真)

9. Fig. 30-3 鋇状銅製品 (右: X線写真)

Ph. 8 博多 201 次出土金属製品写真

番号	径 (mm.)	銅銭の名称 (種類)	初鑄年	出土遺構・層位ほか
1		銭貨 (開元通寶)	621	1 面 SX007 (不明遺構または包含層)
2	24.5	銭貨 (元口口寶)		1 面 SE010 (推定井戸遺構上層)
3	22.0	銭貨 (咸平元寶)	998	1 面 SK030A
4	26.0	銭貨 (判読不能)		1 面 SK033 最下層
5	25.0	銭貨 (太平通寶か)	976	1 面 SK036
6	25.5	銭貨 (判読不能)		1 面 SK038
7	25.0	銭貨 (元祐通寶)	1086	1 面 SK040
8		銭貨 (小片・通)		1 面 SP043
9		銭貨 (小片)		1 面 SP045
10		銭貨 (熙寧元寶か)	1068	1 面 SK052
11	24.0	銭貨 (判読不能)		1 面 SK062
12	24.5	銭貨 (咸平元寶)	998	1 面 SD096
13		銭貨 (小片)		1 面下 SK131 中層以下
14		銭貨 (無文銭)		1 面 SK151 上層
15	(35.0)	銭貨 (崇寧通寶)	1102	1 面 SP159
16		銭貨 (小片)		1 面 SK147 北半 (SP175)
17	(24.5)	銭貨 (至口通口)		1 面 SK231 上部
18	25.0	銭貨 (元祐通寶)	1086	1 面下 SP394
19	24.0	銭貨 (熙寧元寶)	1068	1 面下 SP394
20	24.0	銭貨 (嘉祐元寶)	1056	1 面下 SP394
21	24.0	銭貨 (元豐通寶)	1078	A1 グリッド 1 面遺構検出
22	25.0	銭貨 (元口口寶)		D1 グリッド 鋤取り時遺構上面
23	24.5	銭貨 (宣和通寶)	1119	1 面下 SX328 下層
24	25.0	銭貨 (判読不能)		1 面下 SX328 下層
25	25.5	銭貨 (天禧通寶)	1017	2 面 SE404 南~南東拡張 (掘り方?)
26	25.5	銭貨 (判読不能)		1 面下 SE404
27		銭貨 (小片)		1 面下 SK464
28	26.0	銭貨 (元豐通寶)	1078	2 面 SX247 (不明大型土坑?)
29	25.0	銭貨 (天聖通寶)	1023	2 面 SK402
30	26.0	銭貨 (判読不能)		2 面 SE404
31	20.0	銭貨 (判読不能)		2 面 SX405
32		銭貨 (小片)		2 面 SE404南拡張 (掘り方)
33	25.5	銭貨 (判読不能)		2 面 SX405
34		銭貨 (小片)		2 面 SP466 (1 面 SK145 下層)
35		銭貨 (小片)		2 面 SK410
36		銭貨 (小片・寶)		1 面下 SK1062-1063 (SK501 上層)

表 1：博多 201 次出土銅銭一覧表 (径の ( ) は復元径)



Ph. 9 博多 201 次出土銅銭 X 線写真 (縮尺不統一) ※番号は表 1 と対応する。

<Fig. 22~27 凡例>

ハ=土師器、ス=須恵器、龍青=龍泉窯系青磁、白=白磁、陶=陶器、磁=磁器、瓦質=中近世瓦質土器、東播系ス=東播系須恵器、肥前=肥前系陶磁器、皿=皿・小皿、糸=底部 (回転) 糸切り、板=底部板目圧痕、回ナ=回転ナデ、ナ=ナデ、へ=底部ヘラ切り、回ケ=回転ヘラケズリ、タ=タタキ、スス=煤 (油煙など) 付着痕跡、口ハゲ=口禿げ、暗褐=暗褐色、褐=褐色

なお中世陶磁器の分類 (「龍青・碗 II-2」等) と編年は、基本的に下記の「博多分類」に依拠した。

<博多分類>森本朝子 1984「博多出土貿易陶磁器分類表」『福岡市埋蔵文化財調査報告書』第 105 集、佐藤一郎 1996「輸入陶磁器の分類」『博多遺跡群出土墨書資料集成』博多研究会 (博多分類と大宰府分類の対照あり)

また中世の土師器坏皿類の分類と編年については、十分活用できなかったが、以下を参照した。

山本信夫1990「統計上の土器—歴史時代土師器の編年研究によせて—」『乙益重隆先生古稀記念論集』、楠瀬慶太 2007「土師器食膳具から見た中世博多の土器様相—博多遺跡群の土師器編年—」『九州考古学』第 82 号

その他、鉄製品の一部 (Fig. 28・29) と銅製品の一部 (Fig. 30) および銅銭 (表 1、Ph. 9) を報告している。金属製品の実測はX線写真を参照した。遺物の種類等は図中に示している。次項では出土した動物遺存体について報告する。

### ・博多第 201 次調査出土の動物遺存体

博多 201 次調査では多くの動物遺存体が出土した。これらは遺構の掘り下げ時に目視によって発見したものであって、土壌のフローテーション等を行っていない。観察を行った骨の多くは取り上げ後に細片化していた。これは近年、博多遺跡群内ではマンションや事務所等が増えたため、アスファルト等に覆われていない土壌が露出している面積が減ったことや、地下水の汲み上げ等によって地中の水分が減ったため、地下から出土する井戸枠の木桶などの木製品や動物・植物遺存体の保存状態は劣化しつつあると考えられる。出土した動物遺存体の種は、イルカ・クジラ類、ウシ、ウマ、イヌなどで哺乳類が多い。その他には魚類が 1 点、鳥類 (手根中手骨 ニワトリ SX193) が 1 点出土しているが、魚類はサンプルがないため、同定できなかった。調査は、包含層 (遺構検出面) を 3 面に分けて行っている。砂丘は南側が低く傾斜しているため、同じ平坦な調査面でも北東側と南西側では検出する遺構の時期が違っているが、おおよそ最下層 (第 3 面) は飛鳥～奈良時代、第 2 面は奈良～12 世紀後半前後、第 1 面は 13～14 世紀と 16 世紀以降の遺構を多く検出している。

第 3 面の SP660 から出土した歯は奈良時代に属する。ビニールを持ち上げた時点で細片化したため断定はできないが、崩れる前の大きさからはウシ、もしくはウマである。調査区の南側に位置する祇園近辺には同時期の官衙が存在し、その北側には官人の居住区が存在した。本調査区はその更に北に位置し、博多濱の砂丘の北端に近い。官衙で使用していた運搬用のウシ・ウマの廃棄土坑などがあつた可能性がある。第 1 面と第 2 面で出土したのはイルカ類が多い。时期的には 12 世紀中頃～13 世紀中頃に属す。イルカ類は博多遺跡群では多く出土する動物で、これまでは 12 世紀頃から出土し始め、13 世紀後半になると出土する哺乳類はイルカ類が主になるとしてきた。しかし、最近 12 世紀代で出土するイルカ類の骨が増えつつある。12 世紀にイルカ漁が始まったとして、その初期からイルカ類を盛んに利用していた可能性が出ており、201 次出土の動物遺存体はそれを示す良い資料といえる。

(埋蔵文化財調査課 屋山 洋)

### Ⅲ. 調査のまとめ

本地点では北側周辺の様相とは異なり 12 世紀中頃～14 世紀まで予想以上の密度の遺構の展開があり街場の縁辺であつたこと、博多濱Ⅱ砂丘北端の地形変遷過程に若干の修正が必要なこと、飛鳥～奈良時代の遺跡群の展開の北端が認められたことが、201 次調査の主要な成果と言えよう。

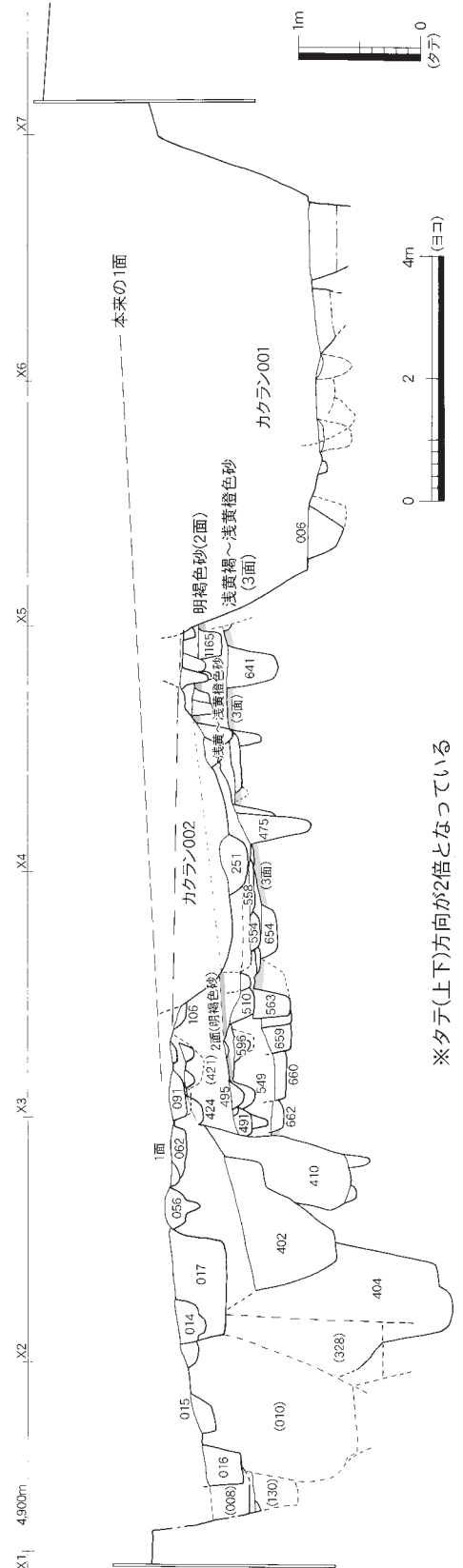


Fig. 31 調査区南北縦断面次実測図 (タテ 1/60, ヨコ 1/120)





博多 201 次調査第 1 面全景 (北西から)





博多 201 次調査第 2 面全景（北西から）





1. 第1面南部遺構群調査状況（北西から）



2. 第1面A1・2グリッド調査状況（西から）



3. 第1面B2・B1グリッド調査状況（東から）



5. 第1面C1・2グリッド調査状況（西から）



4. 第1面B1・2グリッド調査状況（西から）





1. 第1面C2グリッド遺構検出状況（北西から）



2. 第1面C2グリッド遺構掘削状況（北西から）



3. 第1面D1・C1グリッド遺構検出状況（西から）



4. 第1面D1グリッド遺構掘削状況（東から）



5. 攪乱001掘削状況（北西から）



6. SK030A遺物出土状況（東から）



7. SK030A東西土層断面（南から）





1. SD096 上面検出状況 (南から)



2. SD096 掘削状況 (南から)



3. SD096 土層断面 (北から)



4. SD096 完掘状況と周囲遺構 (西から)



5. SK110 遺物出土状況 (東から)



6. SK010 下部土層断面 (北から)



7. SE010 下部・SX328 下層掘削状況 (西から)



8. SX328 中層礫・遺物集中出土状況 (南から)



9. SK097 下部遺構調査状況 (西から)





1. SK097 床面検出状況 (南東から)



3. SK150 遺物出土状況 (北東から)



4. SK410 調査状況 (南から)



2. SK131・285・286下層遺物出土状況 (南から)



5. SK150 下層遺物出土状況 (北から)



6. SK410 下層土層断面 (北から)



7. 1面下A1北・B1南グリッド西側 (西から)



8. 1面下B1東・B2グリッド (西から)



9. 1面下B1-2南グリッド (東から)



10. 2面上B2西・B1グリッド (東から)



12. 2面上B1グリッド (西から)



11. 2面上B2・B1 東グリッド (東から)



13. SK488・508 遺物 出土状況 (東から)





1. 2面A2-1グリッド調査状況（東から）



2. 2面A2-1北・B2-1グリッド調査状況（東から）



3. 2面B1-2グリッド調査状況（西から）



4. SK382・383・213 掘削状況（東から）



5. SK419 完掘状況（南から）



7. SK501 最下層杵状痕跡掘削状況（北から）



6. SK501 途中掘削状況（下層まで；北から）



11. SK475 土壙墓遺物・人骨出土状況（東から）



8. SK401 完掘状況・土層断面（南西から）



9. SE404 完掘状況（東から）



12. SK475 下部人骨出土状況（南から）



10. SX (SE?) 405 完掘状況（東から）





1. SK521 土壙墓上層人骨出土状況  
(西から)



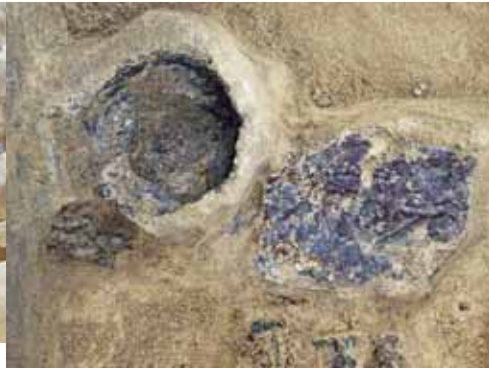
2. SK521 土壙墓遺物・人骨出土状況  
(西から)



3. SK521 土壙墓人骨  
出土状況 (南から)



4. SK521 土壙墓墓壙縦断面状況  
(東から)



5. SK521 土壙墓烏帽子および  
頭骨出土状況近景 (南から)



7. SK529 北・SX1143 南  
上層土器検出状況 (南から)



6. SK524 土壙墓調査区西壁中頭骨？  
出土状況 (東から)



9. SK506・585 土器出土状況 (南西から)



11. 3面C2 グリッド遺構検出状況  
(北から)



10. SK529 (左上)・SX1143・SX574  
土器出土状況 (東から)



8. SK529 (手前)・SX1143  
土器出土状況 (南から)



12. 3面C2・C1 東グリッド遺構  
掘削状況 (北から)



13. 3面B1-2 グリッド  
遺構掘削状況 (南東から)

# 報告書抄録

ふりがな	はかた 156 - はかたいせきぐんだい201じちょうさほうこく-
書名	博多 156
副書名	- 博多遺跡群第 201 次調査報告 -
巻次	
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	1291
編著者名	久住猛雄
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒810-8621 福岡市中央区天神 1 丁目 8-1 電話番号 092-711-4667
発行年月日	西暦2016年 3 月25日

遺跡名ふりがな	はかたいせきぐんだい 201 じちょうさ		
遺跡名	博多遺跡群第 201 次調査		
所在地ふりがな	ふくおかしはかたかみごふくまち 250-1、252-1、253、259-1、260-1、260-2		
遺跡所在地	福岡市博多区上呉服町 250-1、252-1、253、259-1、260-1、260-2		
市町村コード	40130		
遺跡番号	0121		
北緯	北緯 33 度 35 分 55 秒 (世界測地系)		
東経	東経 130 度 24 分 44.5 秒 (世界測地系)		
調査期間	2014. 4. 8~2014. 6. 18		
調査面積 (㎡)	159. 65㎡		
調査原因	共同住宅建設		
種別	主な時代	主な遺構	主な遺物
集落、都市、墓地	飛鳥時代、奈良時代、平安時代、鎌倉時代、室町時代	<p>第 1 面：主に 13 世紀以降の土坑・井戸上部・柱穴など多数</p> <p>第 2 面：11~13 世紀の土坑・井戸・柱穴など多数、12 世紀前後の土壇墓数基、奈良時代の土坑・ピット・土器群</p> <p>第 3 面：飛鳥時代後期~奈良時代の土坑・ピット・土器群</p>	<p>古墳時代の土師器・陶質土器?、飛鳥・奈良時代の須恵器・土師器、平安時代後期・鎌倉時代・室町時代の土師器・瓦器・輸入陶磁器・国産陶器、銅銭、銅製品、鉄製品がある。その他、平安時代末期の土壇墓から人骨が、他の遺構から獣骨が出土。鳥帽子の可能性のある漆製品が土壇墓から出土。</p>
			<p>特記事項</p> <p>当初の予想に反し多くの遺構が重層的に検出されたが、遺物が博多遺跡群としては少なかった (約 150㎡で 35 箱) のは中世都市の街場での縁辺部であることを示すだろう。中世前半期の土壇墓群の存在も街場の縁辺部であることを示すか。ただし銅銭の出土は計 36 枚で、必ずしも少なくない。井戸は調査区が狭小で完掘できたのが少なかったが、調査区の南側に集中する可能性が高いのは、北側の前面道路がある時期からの都市の道路の名残として、現在の地割も中世のある時期からの短冊形街区 (屋敷地) の名残で、その奥に井戸が営まれたことを示すのかもしれない。</p> <p>さらに予想外だったのは砂丘の小ピークが調査区北半にあり、飛鳥時代後期から奈良時代の遺構・遺物がまとまって検出されたことである。建物や住居は不明で、土坑群とピット (柱穴として建物となるか不明確) 群が見つまっている。古代においては、この敷地の北半を砂丘の小ピークとして、北側に急に下がる地形だった可能性があり、当時の博多遺跡群南部の官衙を含む集落中心部とは異なる機能空間であった可能性がある。</p> <p>本調査は、博多遺跡群における砂丘の形成過程や旧地形の変遷、古代集落の遺構分布や中世都市博多の街場の構造、などについて、今までの想定の一部を見直すべき成果を得ることができた。</p>

## 博多 156

- 博多遺跡群第 201 次調査報告 -  
福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1291 集

2016年 3 月25日

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神 1 丁目 8-1  
印刷 陽文社印刷株式会社  
福岡市南区大楠 2 丁目 4-10



